

第 4 章

動植物介在活動研究

研究エピソード 4

動植物介在活動研究に際して

「陸前高田の一本松に勇気もらった」「震災地に咲く、タンポポに励まされた」「原発の避難地域に残してきた愛犬に会いたい」……

2011.3.11 以来、動植物とひととの関わりは、より深く、鮮明に大きく転換した。“ペット，愛玩，観賞，癒し，構成員，パートナー……”との関わりやつながりから，さらに空気や水のように無くてはならない，必要不可欠な「共生」の絆で結ばれた存在としての動植物になってきている。

「ひとと動物のこころ研究会」の代表をなさっておられた，農学部の中藤先生から，「一緒に研究をしませんか」とのお誘いを受けたのは，10 年以上も前に遡る。

当時，「学級崩壊」「いじめ」「虐待」等，一日として，こうした事がニュース，新聞に載らない日は無かった。

手をこまねいていることは，できない。何か始めなければとの思いで一杯であった矢先，先生のお誘いを機にスタートしたのがこの研究である。

その一端を，紹介したい。

「はじめに」

「学級崩壊」「家庭内暴力」「いじめ」「障害児・者、高齢者、社会的弱者に対するいじめや、不当な差別や偏見」「要介護高齢者の放置」等、極めて憂慮すべき社会問題が増加している。こうした問題の一端は、“心の荒廃”に由来すると考えられる。こうした“荒廃した心”を救うには、宗教も哲学も、精神医学もそれぞれ有効であることは広く知られているところである。他方、各種の動植物の介在や触れあいも大きな役割を果たすことが見直されてきているのも事実である。障害の有無や軽重に関わらず、人間誰しものが、そうした身近な動植物や自然との触れあいや交流によって、「こころの成長や発達」はもとより、さまざまな「心理・精神的影響」を受けるといった見解は、おおかたのコンセンサス

を得てきている。精神生活に安寧をもたらし、健康の維持に良好な結果をもたらすとか、重度の障害児・者の治療や老人の福祉等にも多くの良好な結果をもたらすといった報告も増えてきている。しかし、近年、そうした「触れあい」のチャンスが、「自然」に保障されるとは必ずしも言い難く、より一層困難になってきている。大いなる発達の可能性を秘めている乳幼児期の子どもの場合、「動植物や自然との触れあい」は、とりわけ重要である。21世紀が「新・子どもの世紀」にふさわしいものとなるよう、これまでにままして、大人の責務は大きいものとなってきている。そのためにも、改めて、「動植物や自然との触れあい」の保障の実態や意義や、根源的な問い直しなどを科学的に明らかにする研究並びに実践的研究が焦眉の課題となっ

てきている。

「近年、国内外で改めて見直され、かつ、21世紀においてはさらに重要視されてくるであろうと考えられる「自然と人間との共生」「動物と人間との共生」「民族と民族との共生」「障害を持っている人と持っていない人との共生」「高齢者と若い人との共生」「異宗教の人と異宗教の人との共生」等々、あらゆる面で「共生」は根本的な「キーワード」になるであろうことは、おおかたの人々のコンセンサスを得てきているところである。しかし、昨今では特にも、「競争」「弱肉強食」「リストラ」等々(「市場原理の御旗」のもとにすべてが許される)が重視され、こうした「共生」の考え方や、そうした考え方に基づいた生き方は「自然」に獲得されるとは言い難いばかりか、より一層困難になってきている。

岩手大学教育学部附属幼稚園、岩手大学教育学部附属小学校、人権感覚の発達とその指導, 2000, 80-89.

1 乳幼児と動植物飼育、栽培活動

—岩手の幼稚園・保育園の実態調査（続報2：「有効性」を中心に）—

鎌田 文 聡

(岩手大学教育学部)

はじめに

「学級崩壊」、「家庭内暴力」、「いじめ」、「障害児・者、高齢者、社会的弱者に対するいじめや、不当な差別や偏見」、「要介護高齢者の放置」等、極めて憂慮すべき社会問題が増加している。こうした問題の一端は、「心の荒廃」に由来すると考えられる。こうした「荒廃した心」を救うには、宗教も哲学も、精神医学もそれぞれ有効であることは広く知られているところである。他方、各種の動植物の介在や触れあいも大きな役割を果たすことが見直されてきているのも事実である。障害の有無や軽重に関わらず、人間誰しもが、そうした身近な動植物や自然との触れあいや交流によって、「こころの成長や発達」はもとより、さまざまな「心理・精神的影響」を受けるといった見解は、おおかたのコンセンサスを得てきている。精神生活に安寧をもたらす、健康の維持に良好な結果をもたらすとか、重度の障害児・者の治療や老人の福祉等にも多くの良好な結果をもたらすといった報告も増えてきている。しかし、近年、そうした「触れあい」のチャンスが、「自然」に保障されるとは必ずしも言い難く、より一層困難になってきている。大いなる発達の可能性を秘めている乳幼児期の子どもの場合、「動植物や自然との触れあい」は、とりわけ重要である。21世紀が「新・子どもの世紀」にふさわしいものとなるよう、これまでにもまして、大人の責務は大きいものとなってきている。そのために、改めて、「動植物や自然との触れあい」の保障の実態や意義や、根源的な問い直しなどを科学的に明らかにする研究並びに実践的研究が焦眉の課題となってきた。

新幼稚園教育要領（1998.10）及び新保育所保育指針（1999.10）では、「人間関係」、「環境」および「表現」という三つの領域に「身近な動植物や自然とのふれあい活動」の大切さが以下のように位置づけられている。

- 「人間関係」：自然や身近な動植物に親むことなどを通して豊かな心情が育つようにすること
- 「環境」：「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかわわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかわわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公心、探求心などが養われるようにすること」
- 「表現」：「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得られた感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること」

ここでは、こうした諸点も課題意識として踏まえたうえで、乳幼児期（就学前）の子どもにおける「動物介在活動（Animal Assisted Activity: AAA）」及び「植物介在活動（Plant Assisted Activity: PAA）」についての基礎的研究として提起するものである。特に本稿では、第1報での「保育園・幼稚園における「動植物の飼育・栽培活動」の岩手の現状」（鎌田, 1999.3）の「続報」とし、就学前教育の重要な役割を果たしている保育園や幼稚園の場における「動植物飼育・栽培活動」の取り組みを、岩手県内にある国、県、市町村の公、私立また、認可、無認可を問わず、全ての幼稚園、保育園および託児所等を対象に、筆者が1998年11月に実施した「動植物介在活動に関するアンケート調査研究」を下に、動植物飼育・栽培活動の「良かった点：有効性」に視点を当て、その結果を概略的に紹介するものである。

1. 研究目的

岩手県内にある就学前教育の場である保育園や幼稚園や託児所における「動植物飼育・栽培活動」や「動植物との

触れ合い」の影響（良かった点：有効性）に視点をあて、それぞれの場の個性や共通性に関する実情の一端を分析、検討することを目的とする。

2. 研究方法

1998（平成11）年10月から11月末まで、岩手県内にある認可・無認可保育園、託児所や幼稚園（季節により休園中またはすでに休園となっている園は含まれていない）のすべての園を対象に、以下の六点到焦点をあてた26項目のアンケート調査を郵送方式で実施する。

- 園の規模、障害児や障害の疑いのあるこどもの入園状況
- 園のある地域の自然環境（1988（平成1）年と1998（平成10）年の変化）
- 飼育・栽培している動植物の種類と数
- 子どもと動植物との関わり方（毎日の世話や、動植物の誕生、芽が出たときまた、死や枯れたことを経験したとき等）
- 園として飼育・栽培活動へのとらえかた（よかったこと、研修の機会等）
- 飼育・栽培活動における悩みや困難

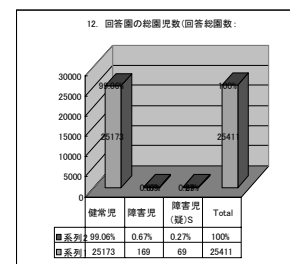
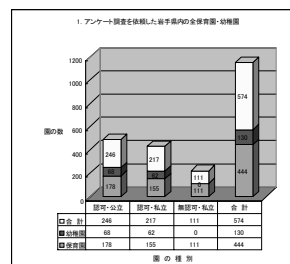
3. 研究結果

（1）アンケート調査を依頼した岩手県内の保育園・幼稚園

アンケート調査対象園は、岩手県内にある国・市町村、私立また認可、無認可を問わず、全ての保育園や幼稚園である。大別すると、保育園444園、幼稚園130園、合計574園であった。認可・公立保育園が178園と最も多く、ついで認可・私立保育園が155園であり、認可・公立幼稚園68園、認可・私立幼稚園62園と、認可が無認可の保育園111園の4倍以上であった。

（2）回答を頂いた岩手県内の保育園・幼稚園数

回答を得た岩手県内の幼稚園と保育園は全体で401の園、ほぼ7割に当たる。認可・公立保育園からは、172園と最も多く、ついで認可・私立保育園の99園から、さらに認可・公立幼稚園からは58園、認可・私立幼稚園の38園、無認可・私立保育園の31園からも回答を得た。



（3）回答園の総園児数

回答のあった401園の保育園と幼稚園に1998年11月1日時点で入園している総園児数は25,411名であった。障害児として把握されている園児数は169名（0.67%）であり、障害の疑いのある園児数は69名（0.27%）、健康児は25,173名（99.06%）であった。

障害児の年齢別クラスでは0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで5名、2歳児クラスで8名、3歳児クラス29名、4歳児クラス60名、年長の5歳児クラスでは67名と、年齢が高くなるにつれて多くなっている。また、障害の疑いのある子どもでは、0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで4名、2歳児クラスで7名、3歳児クラス17名、4歳児クラス22名、年長の5歳児クラスでは19名と、3歳以降20名前後とそれ以前のクラスより多くなるなど、より顕在化してきていることが示されている。

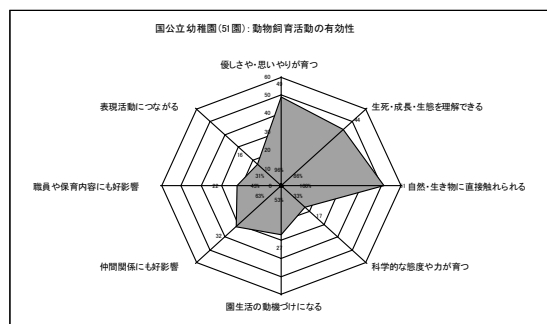
他方、健常児数では0歳児クラスで847名、1歳児クラスで1,676名、2歳児クラスで2,169名、また3歳児クラスでは5,245名、4歳児クラスで7,388名、年長の5歳児クラスでは7,848名であった。このことは、3、4歳以降幼稚園に入園する幼児が、それだけ増えていることを示している。

(4) 幼稚園・保育園の園種別ごとの動植物飼育・栽培活動の有効性

A) 各園での個別性（以後の各園種別の図参照のこと）

1) 国公立幼稚園

① 「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、国公立幼稚園で最も



高い割合（動物飼育活動：100%、植物栽培活動：100%）で挙げられていたのは、「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ということであった。「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそ「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそ、はじめてその後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらにはそのあり方が形成されていくことを考えるならば、そのベースとしてのものが各園で共通的に挙げられていたことの意義は極めて大きいもので、しかも、極めて重要であると考えられる。

② 二番目に高い割合で挙げられていたのは、「優しさや思いやりが育つ」ということであった。「動物飼育活動」では平均94.5%、「植物栽培活動」では74.0%とほぼ7～9割前後の割合であったことから伺えるように、こうした活動が如何に乳幼児期からの人間教育にとって大切な活動であるかが示されている。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも20.5%と2割ほどより高い割合を示していたというこの意味は、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要なポイントであるといえよう。

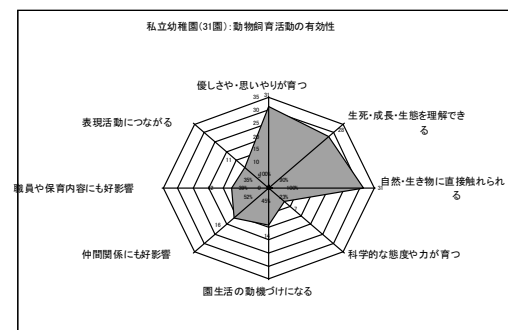
③ 三番目に高い割合で挙げられていたのは、「生死や成長や生態を理解できる」ということであった。「動物飼育活動」では平均86.0%とほぼ8.5割の園で、また「植物栽培活動」では、60.0%と、6割であったことから伺えるように、こうした活動が、生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって、如何に乳幼児期から大切な活動であるかを示している。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも26.0%と2.6割ほどより高い割合を示していたこの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、さらに重視すべき重要な活動であるといえよう。

④ 四番目に高い割合で挙げられていたのは、「仲間関係にも好影響をもたらす」ということであった。興味深いことは、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、「動物飼育活動」であることが明瞭に示されている。「動物飼育活動」が63%であり、「植物栽培活動」は45%とほぼ2割もの違いであった。このことの示している意味を軽視することはできないものと考えられる。

⑤ 「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、挙げられていたが興味深いことは、これらのいずれも、「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも9～16%も高いことである。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で49%、「動物飼育活動」で33%と16%もの違いであった。このことの示している意味は軽視できない。

2) 私立幼稚園

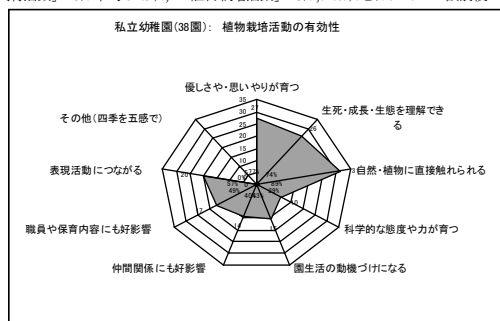
① 「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、国公立幼稚園で最も



高い割合（動物飼育活動：100%、植物栽培活動：100%）で挙げられていたのは、「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ということであった。「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそ、はじめてその後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらにはそのあり方が形成されていくことを考えるならば、そのベースとしてのものが各園で共通的に挙げられていたことの意義は極めて大きいもので、しかも、極めて重要であると考えられる。

② 二番目に高い割合で挙げられていたのは、「優しさや思いやりが育つ」ということであった。

「動物飼育活動」では平均 94.5%、「植物栽培活動」では 74.0% とはほぼ 7〜9 割前後の割合であったことから



同えるように、こうした活動が如何に乳幼児期からの人間教育にとって大切な活動であるかが示されている。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 20.5%と 2 割ほどより高い割合を示していたということの意味は、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要なポイントであるといえよう。

③ 三番目に高い割合で挙げられていたのは、「生死や成長や生態を理解できる」ということであった。「動物飼育活動」では平均 86.0% とはほぼ 8.5 割の園で、また「植物栽培活動」では、60.0% と、6 割であったことから同えるように、こうした活動が、生命の大切さを感得する基礎としての就学前教育にとって、如何に乳幼児期から大切な活動であるかを示している。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 26.0% と 2.6 割ほどより高い割合を示していたことの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、さらに重視すべき重要な活動であるといえよう。

④ 四番目に高い割合で挙げられていたのは、「仲間関係にも好影響をもたらす」ということであった。興味深いことは、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、「動物飼育活動」であることが明瞭に示されている。「動物飼育活動」が 63% であり、「植物栽培活動」は 45% とはほぼ 2 割もの違いであった。このことの示している意味を軽視することはできないものと考えられる。

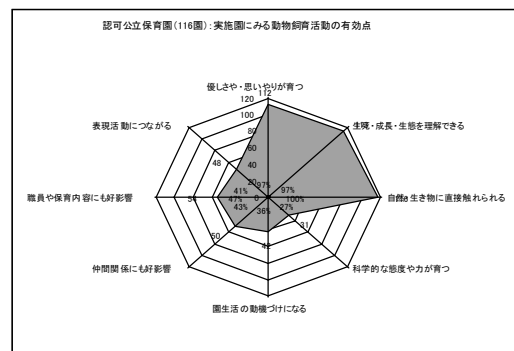
⑤ 「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、挙げられていたが興味深いことは、これらのいずれも、「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも 9〜16% も高いことである。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で 49%、「動物飼育活動」で 33% と 16% もの違いであった。このことの示している意味は軽視できない。

3) 公立認可保育園

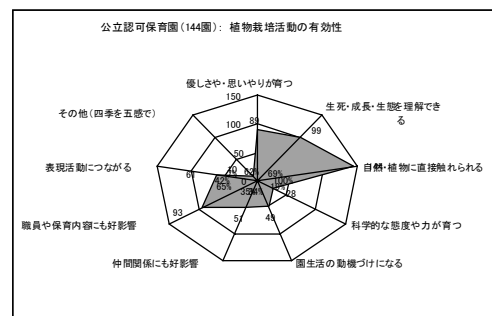
① 「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、公立認可保育園で最も高い割合（動物飼育活動：100%、植物栽培活動：100%）で挙げられていたのは、「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ということであった。「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそ、はじめてその後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらにはそのあり方が形成されていくことを考えるならば、そのベースとしてのものが各園で共通的に挙げられていたことの意義は極めて大きいもので、しかも、極めて重要であると考えられる。

② 二番目に高い割合で挙げられていたのは、「優しさや思いやりが育つ」ということであった。「動物飼育活動」では平均 97%、「植物栽培活動」では 62% とはほぼ 6 割強〜10 割弱であったことから同えるように、こうした活動が如何に乳幼児期からの人間教育にとって大切な活動であるかが示されている。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 35% と 3.5 割ほどより高い割合を示していたということの意味は、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要なポイントであるといえよう。

③ 三番目に高い割合で挙げられていたのは、「生死や成長や生態を理解できる」ということであった。「動物飼育活動」では平均 97.0% とはほぼ 10 割の園で、また「植物栽培活動」では、69.0% と、ほぼ 7 割であったことから同えるように、こうした活動が、生命の大切さを感得する基礎としての就学前教育にとって、如何に乳幼児期から大切な活動であることを示している。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 28.0% と 3 割ほどより高い割合を示していたことの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、さらに重視すべき重要な活動であるといえよう。



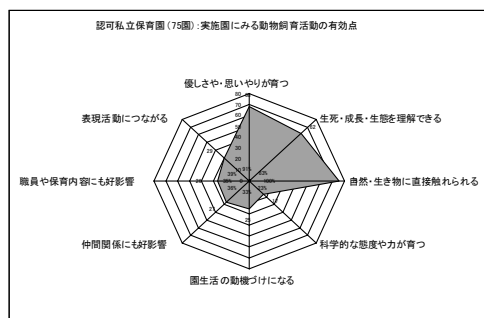
④ 四番目に高い割合で挙げられていたのは、「仲間関係にも好影響をもたらす」ということであった。興味深いことは、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、「動物飼育活動」であることが明瞭に示されている。「動物飼育活動」が 43% であり、「植物栽培活動」は 33% とはほぼ 1 割の違いであった。このことの示している意味を軽視することはできないものと考えられる。



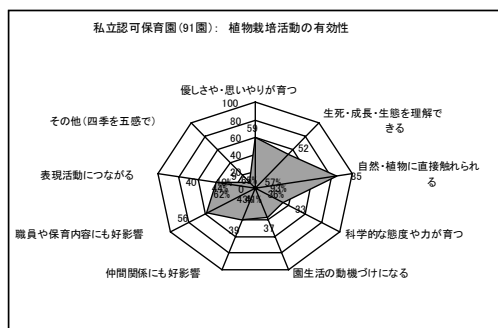
⑤ 「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、挙げられていたが興味深いことは、「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも 18% も高く挙げられていたのが「職員や保育内容にも好影響」とのことであった。このことの示している意味は軽視できない。

4) 私立認可保育園

① 「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、私立認可保育園でも高い割合（動物飼育活動：100%、植物栽培活動：93%）で挙げられていたのは、「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ということであった。「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそ、はじめてその後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらにはそのあり方が形成されていくことを考えるならば、そのベースとしてのものが各園で共通的に挙げられていたことの意義は極めて大きいもので、しかも、極めて重要であると考えられる。



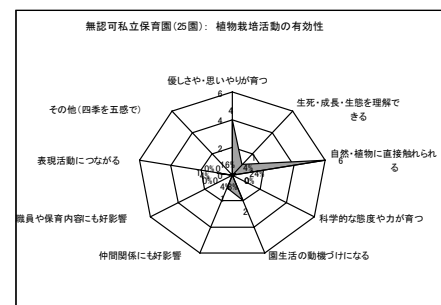
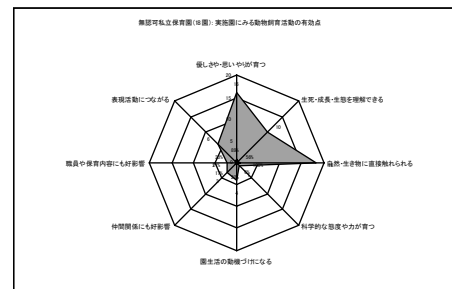
- ② 二番目に高い割合で挙げられていたのは「優しさや思いやりが育つ」ということであった。「動物飼育活動」では平均 0.9%、「植物栽培活動」では 57.9%とはほぼ 4～9割前後の割合であったことから伺えるように、こうした活動が如何に乳幼児期からの人間教育にとって大切な活動であるかが示されている。特にも「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 25%と 29割ほどより高い割合を示していたということの意味は、今後の取り組みに際して考慮すべき重要なポイントであるといえよう。
- ③ 三番目に高い割合で挙げられていたのは「生死・成長や生態を理解できる」ということであった。「動物飼育活動」では平均 869%とほぼ 8割強の園で、また「植物栽培活動」では 749%と 15割弱であったことから伺えるように、こうした活動が、生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって如何に乳幼児期から大切な活動であるかを示している。特にも「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 279%と 29割ほどより高い割合を示していたことの意味は、改めて「植物栽培活動」はもとより「動物飼育活動」も今後の取り組みに際してさらに重視すべき重要な活動であるといえよう。
- ④ 四番目に高い割合で挙げられていたのは「仲間関係にも好影響をもたらす」ということであった。興味深いことは、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、「植物栽培活動」であることが明瞭に示されている。「植物栽培活動」が 36%、「動物飼育活動」は 65%でありとはほぼ、割別の違いであった。このことは、私立認可保育園のみに見られたことであるが、このことの示している意味を軽視することはできないものと考えられる。



- えられる。
- ⑤ 「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として挙げられていたが興味深いことは、これらのいずれも「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも 0～5%も高いことである。とりわけ「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で 65%、「動物飼育活動」で 26%と、6%もの違いであった。このこ

との示している意味は軽視できない。

94 無認可保育(託児)園



- ① 「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、無認可保育(託児)園で最も高い割合(動物飼育活動：77%、植物栽培活動：02%)で挙げられていたのは、「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ということであった。極く自然にそれらに対する興味や関心が培われることがあってこそ、はじめてその後の対応の仕方や感じ方や考え方にはそのあり方が形成されていくことを考えるならば、そのベースとしてのものが各園で共通的に挙げられていたことの意義は極めて大きいもので、しかも、極めて重要であると考えられる。
- ② 二番目に高い割合で挙げられていたのは「優しさや思いやりが育つ」ということであった。「動物飼育活動」では平均 586%、「植物栽培活動」では 36%とはほぼ 0～9割前後の割合であったことから伺えるように、こうした活動が如何に乳幼児期からの人間教育にとって大切な活動であるかが示されている。特にも「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 1)6%と 1割ほどより高い割合を示していたということの意味は、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要なポイントであるといえよう。
- ③ 三番目に高い割合で挙げられていたのは「生死や成長や生態を理解できる」ということであった。「動物飼育活動」では平均 936%とほぼ 9割の園で、また「植物栽培活動」では 26%であったことから伺えるように、こうした活動が、生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって如何に乳幼児期から大切な活動であるかを示している。特にも「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 976%と 99割ほどより高い割合を示していたことの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、さらに重視すべき重要な活動であるといえよう。
- ④ 四番目に高い割合で挙げられていたのは「仲間関係にも好影響をもたらす」ということであった。興味深いことは、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、「動物飼育活動」であるこ

が明瞭に示されている。「動物飼育活動」が21%であり、「植物栽培活動」は0%とほぼ2割もの違いであった。このことの示している意味を軽視することはできないものと考えられる。

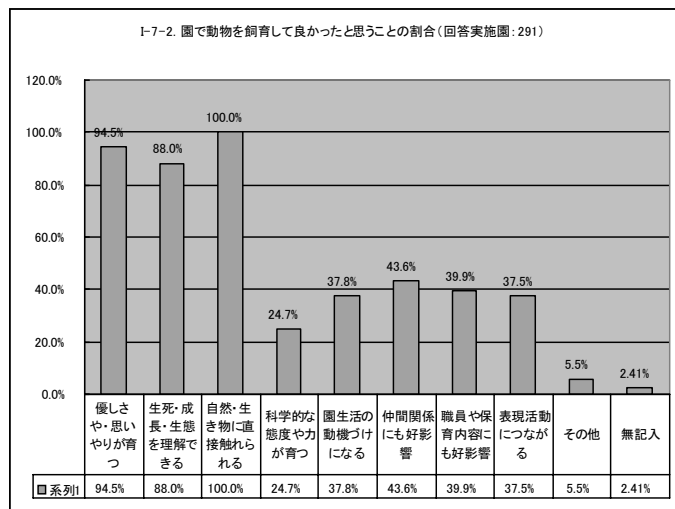
⑤ 「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、挙げられていたが興味深いことはこれらはいずれも、「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも2割りも高いことである。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で0%、「動物飼育活動」で6%と6%の違いであって、このことの示している意味は軽視できない。

B) 各園での共通性 (図表 I-7-2 及び II-3 参照のこと)

① 「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、幼稚園、保育園、託児所、認可、無認可、公立、私立を問わず、園種別を越えて共通的に最も高い割合（動物飼育活動：100%、植物栽培活動：96.6%）で挙げられていたのは、「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ということであった。「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそ、はじめてその後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらにはそのあり方が形成されていくことを考えるならば、そのベースとしてのものが各園で共通的に挙げられていたことの意義は極めて大きいもので、しかも、極めて重要であると考えられる。

② 二番目に高い割合で挙げられていたのは、「優しさや思いやりが育つ」ということであった。「動物飼育活動」では平均 94.5%、「植物栽培活動」では 64.7% とはほぼ 6～9 割前後の割合であったことから伺えるように、こうした活動が如何に乳幼児期からの人間教育にとって大切な活動であるかが示されている。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 29.8% と 3 割ほどより高い割合を示していたというこの意味は、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要なポイントであるといえよう。

③ 三番目に高い割合で挙げられていたのは、「生死や成長や生態を理解できる」ということであった。「動物飼育活



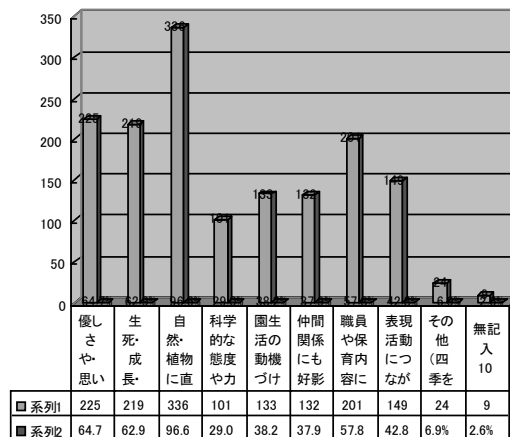
動」では平均 88.0% とはほぼ 9 割の園で、また「植物栽培活動」では、62.9% と、ほぼ 6 割強であったことから伺えるように、こうした活動が、生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって、如何に乳幼児期から大切な活動であるかが示されている。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも 25.1% と 2.5 割ほどより高い割合を示していたことの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、さらに重視すべき重要な活動であるといえよう。

④ 四番目に高い割合で挙げられていたのは、「仲間関係にも好影響をもたらす」ということであった。とはいえ「動

物飼育活動」と「植物栽培活動」のどちらにおいても 40% 前後とそれ程多いとはいえない。しかし、興味深いことは、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、園の種別を越え前者の「動物飼育活動」であることが示されている。「動物飼育活動」が 43.6% であり、後者の「植物栽培活動」は 37.9% であった。確かに 5.7% とそれほどの違いとはいえないが、このことの示している意味を軽視することはできないものと考えられる。

⑤ 「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点：有効性」として、園種別を越えて共通的に挙げられて

II-3. 園で植物を栽培して良かったと思うこと (回答総数: 348 園)



いたことは興味深い。というのもこれらはいずれも、「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも 5～10% 前後も高いことである。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で 29.0%、「動物飼育活動」で 24.7% と 4.3% 程の違いではあったが、このことの示している意味も軽視することはできないものと考えられる。

おわりに

近年、国内外で改めて見直され、かつ、21 世紀においてはさらに重要視されてくるであろうと考えられる「自然と人間との共生」、「動物と人間との共生」、「民族と民族との共生」、「障害を持っている人と持っていない人との共生」

「生」、「高齢者と若い人との共生」、「異宗教の人と異宗教の人との共生」等々、あらゆる面で「共生」は根本的な「キーワード」になるであろうことは、おおかたの人々のコンセンサスを得てきているところである。しかし、昨今では特に、「競争」、「弱肉強食」、「リストラ」等々（「市場原理の御旗」のもとにすべてが許される）が重視され、こうした「共生」の考え方や、そうした考え方に基いた生き方は、「自然」に獲得されるとは言えない。むしろ一層困難になってきている。

本論稿が、21 世紀に生きる子どもたちに、いくばくかでも寄与できること、と同時に、子育てに関係している皆様方にとりましても、何らかのお役に立つ一つの基礎的な資料となりますことを心から願うものです。

2 乳幼児と動物飼育活動

——岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報3:「生、死」への対応)——

鎌田 文 聰*

(2000年9月27日受理)

はじめに

「動植物飼育・栽培活動」や「動植物との触れ合い活動」が子どもにとって良かった(有効)点として、概略、以下の五点がこれまでの研究(鎌田:1999, 鎌田:2000)から示唆されてきた。

①「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対しての興味や関心が培われる」という点が、「動物飼育活動」では100%の園で、「植物栽培活動」では96.6%の園であげられた。

このことは、「極く自然にそれらに対しての興味や関心が培われる」ことがあってこそはじめて、その後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらには、そのあり方が形成されていくものであることを示している点で、その意義は極めて大きい。

②「優しさや思いやりが育つ」という点は、「動物飼育活動」では94.5%の園で、また「植物栽培活動」では64.7%の園であげられた。

注目すべきことは「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも3割ほどより高いことである、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要な点である。

③「生死や成長や生態を理解できる」という点は、「動物飼育活動」で88.0%、「植物栽培活動」では62.9%の園であげられた。生命の大切さを感得する基礎としての就学前教育にとって、如何に大切な活動であるかを示している。特にも「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも2.5割ほどより高い割合を示していたことの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、重視すべき重要な活動であることを示唆している。

④「子ども同士の仲間関係にも好影響をもたらす」という点は、「動物飼育活動」で43.6%、「植物栽培活動」では37.9%の園であげられるにとどまっていた。どちらにおいても40%前後とそれ程多いとはいえない。しかし、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのを見ると、園の種別を越えて前者の「動物飼育活動」であることが示唆されている。このことの示している意味を軽視することはできない。

⑤「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」と

* 岩手大学教育学部

いったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点として、園種別を越えて共通的に挙げられた。「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも5~10%前後も高い。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で29.0%、「動物飼育活動」で24.7%の園であげられているにとどまっていたが、後者よりも4.3%程ではあるが前者の「植物栽培活動」の方が高い。

このことの示している意味も軽視することはできない。

上記のように「動物飼育活動」や「植物栽培活動」が乳幼児期にある子どもにとっての有効性が明らかにされてきた。が、そうした活動の中で特に、子どもへの心理的影響が大きいと考えられる動物の「生まれたとき」および「死んだとき」に際しての、よりよい在り方としての活動の検討が課題であることも示唆されてきた。

1 本研究の目的

保育園や幼稚園や託児室における「動物飼育活動」や「動物との触れ合い」に関するこれまでの研究を踏まえ、本研究では以下の二点について検討することを目的とする。

- 1 子どもへの心理的影響が大きいと考えられる動物の「生まれたとき」および「死んだとき」に際し、各園種でどのような対応をしているのかに焦点をあて、それぞれの場の個性や共通性に関する実情の一端を分析、検討すること。
- 2 それらの対応と「優しさや思いやりを育てる」との相互的な関連の程度についての実情の一端を分析、検討することを通し、動物の「生まれたとき」および「死んだとき」に際してのよりよい在り方としての活動を検討すること。

2 研究方法

1998(平成11)年10月から11月末まで、岩手県内にある認可・無認可保育園、託児所や幼稚園(季節により休園中または休園となっている園は含まれていない)のすべての園を対象に、以下の六点到焦点をあてた26項目のアンケート調査を郵送方式で実施する。

1. 園の規模、障害児や障害の疑いのあるこどもの入園状況
2. 園のある地域の自然環境(1988(平成1)年と1998(平成10)年の変化)
3. 飼育・栽培している動植物の種類と数
4. 子どもと動植物との関わり方(毎日の世話や、動植物の誕生、芽が出たときまた、死や枯れたことを経験したとき等)
5. 園として飼育・栽培活動へのとらえかた(よかったこと、研修の機会等)
6. 飼育・栽培活動における悩みや困難

3 結果と考察

(1) アンケート調査を依頼した岩手県内の保育園・幼稚園

アンケート調査対象園は、岩手県内にある国公市町村、私立また認可、無認可を問わず、全ての保育園や幼稚園である。大別すると、保育園444園、幼稚園130園、合計574園であった。

認可・公立保育園が178園と最も多く、ついで認可・私立保育園が155園であり、認可・公立幼稚園68園、認可・私立幼稚園62園と、認可が無認可の保育園111園の4倍以上であった。

(2) 回答を頂いた岩手県内の保育園・幼稚園数

有効回答を得た岩手県内の幼稚園(96園:73.3%)と保育園(302園:61.2%)は全体で391の園であり、ほぼ7割弱に当たる。認可・公立保育園からは、172園(96.6%)と最も多く、ついで認可・私立保育園の99園(63.9%)から、さらに認可・公立幼稚園からは58園(85.3%)、認可・私立幼稚園の38園(61.3%)、無認可・私立保育園の31園(27.9%)からも回答を得た。

(3) 幼稚園・保育園の園種別ごとの動物飼育活動の「生、死」に対する対応

(A) 各園での個性(以降の各園種別の図を参照のこと)

1 国公立幼稚園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

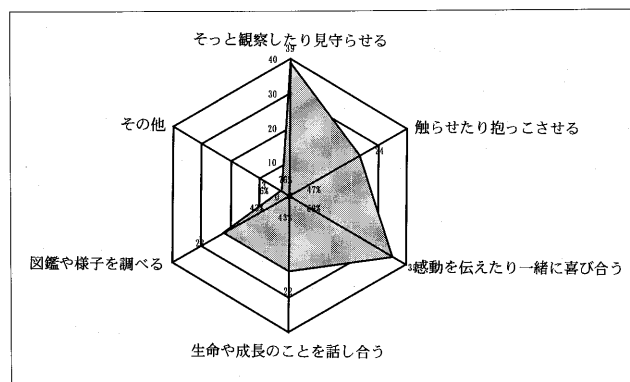


Fig. 1 動物の子どもが生まれたときの対応 (国公立幼稚園; 51園)

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(76%)であり、ほぼ4分の3の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(69%)でありほぼ7割の園であった。さらに三番目に高い割合で挙げられたのは、「触らせたり抱っこさせたりする」(47%)、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(43%)、「図鑑や様子を調べる」(43%)と、いずれも、4割台と半数以下の園で挙げられている程度であった。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられた

のは、「職員と子どもと一緒に埋める」(94%)、ほぼ9.5割の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」(78%)、ほぼ8割の園であった。ついで三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(75%)とほぼ4分の3の園であり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(61%)、ほぼ6割の園で挙げられていた。「天国のことなどについて話し合う」(41%)が、4割台であった以外は、6割から9割以上の園で挙げられているなど、多くの園でかなり重視した取り組みがなされていることが示されている。

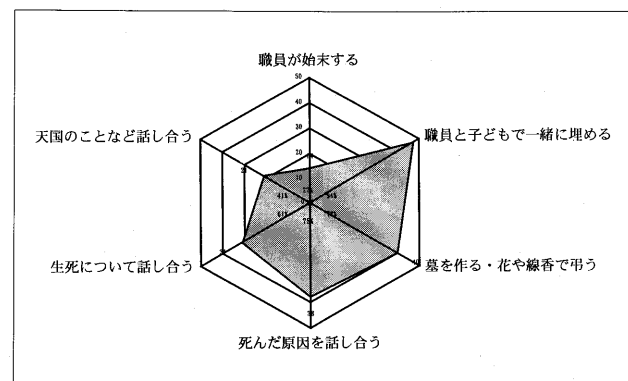


Fig. 2 飼育している動物が死んだときの対応 (国公立幼稚園; 51園)

「生、死」への対応としての上述のことからも伺えるように、国公立幼稚園に於いては、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応も、一定程度大切にしている取り組みをしているが、「飼育している動物が死んだとき」の対応の方を、より多くの園で重視していることが伺える。

幼児期に、こうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」としての重要な礎になるものといえよう。

2 私立幼稚園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、私立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(84%)であり、ほぼ5分の4強の園であった。同様に高い割合で挙げられたのは、「図鑑や様子を調べる」(81%)でありほぼ8割の園であった。

特に「図鑑や様子を調べる」なども、国公立幼稚園よりも約4割弱も高く、かなり重視していることが伺え、極めて興味深い結果を示している。

三番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(74%)ということであり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(45%)、「触らせたり抱っこさせたりする」(29%)であった。

「触らせたり抱っこさせたりする」(29%)が、国公立幼稚園よりも18%も少ない結果が示さ

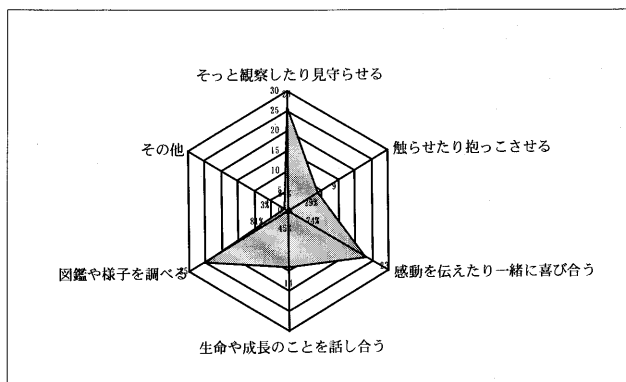


Fig. 3 動物の子どもが生まれた時の対応 (私立幼稚園: 31 園)

れた。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、私立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(94%)であり、ほぼ9.5割もの園であり、ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で吊う」(58%)でありほぼ6割の

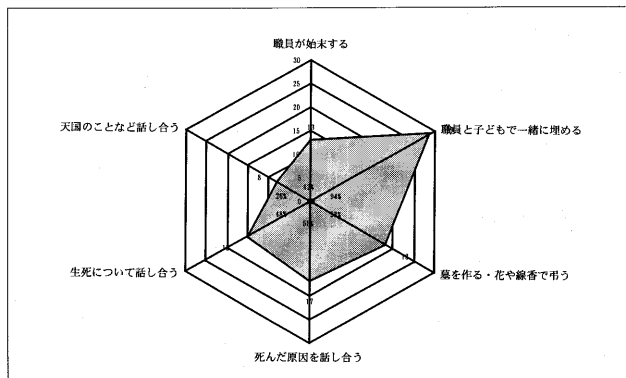


Fig. 4 飼育している動物が死んだ時の対応 (私立幼稚園: 31 園)

園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(55%)とほぼ2分の1強の園であり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(48%)、「天国のことなどについて話し合う」(26%)ということであった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で「職員と一緒に」のとりくみが重視されている。幼児期にこうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとって極めて重要であると考えられる。

3 認可公立保育園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、認可公立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(64%)であり、ほぼ5分の3の園であった。二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(59%)であった。三番目に高

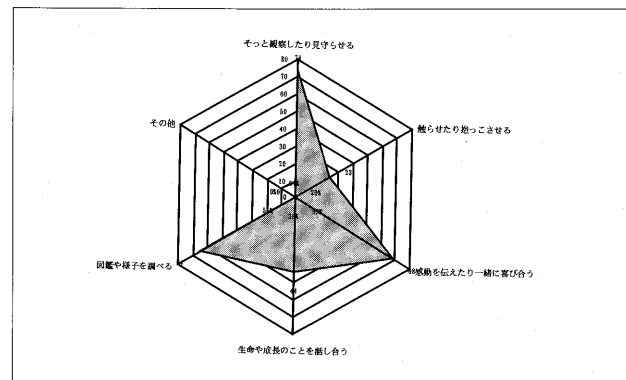


Fig. 5 動物の子どもが生まれた時の対応 (認可公立保育園: 116 園)

い割合で挙げられたのは、「図鑑や様子を調べる」(55%)であり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(38%)であり、「触らせたり抱っこさせたりする」は20%と、2割の園のみであり、幼稚園とは異なった対応であることが示された。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、認可公立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(99%)であり、ほぼ10割もの園であった。次に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(66%)とほぼ5分の3強の園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で吊う」(59%)であり、ほぼ6割の園で、「また、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(44%)、「天国のことなどについて話し合う」(19%)ということであった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期にこうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成

乳幼児と動物飼育活動

67

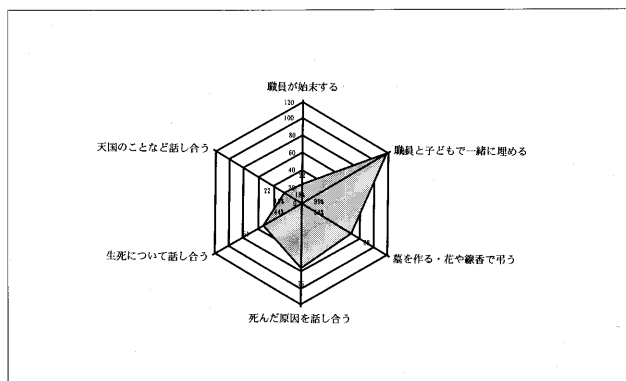


Fig. 6 飼育している動物が死んだ時の対応 (認可公立保育園: 116 園)

長・発達」にとって極めて重要である。

4 認可私立保育園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、認可私立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(69%)であり、ほぼ7割りの園であった。次に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(53%)でありほぼ5割強の園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(45%),「図鑑や様子を調べる」(45%)であり、ついで、「触らせたり抱っこさせたりする」は、21%と、2割程度の園にとどまっていた。

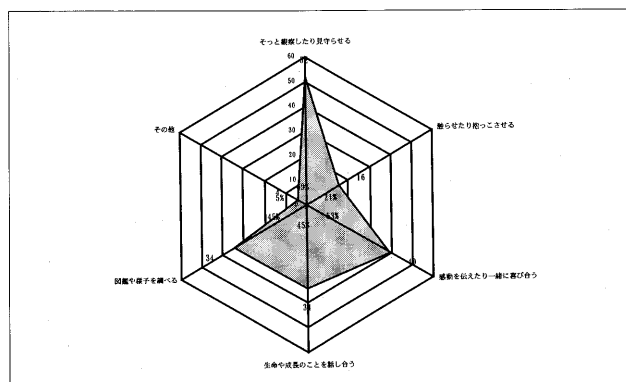


Fig. 7 動物の子どもが生まれたときの対応 (認可私立保育園: 75 園)

68

鎌田 文 聡

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、認可私立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(92%)であり、ほぼ9割強の園であり、二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」(63%)でありほぼ6割強の園

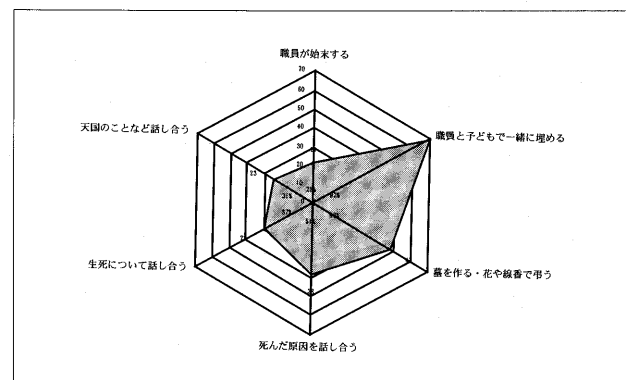


Fig. 8 飼育している動物が死んだ時の対応 (認可私立保育園: 75 園)

であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(51%)とほぼ2分の1の園であった。また、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(37%), また、「天国のことなどについて話し合う」は、31%であった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期にこうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとって極めて重要であることを示している。

5 無認可保育(託児)園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、無認可保育(託児)園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(44%)であり、ほぼ2分の1弱の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(33%)でありほぼ3割の園で挙げられた。三番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(28%)であり、ついで、「触らせたり抱っこさせたりする」は、22%であり、「図鑑や様子を調べる」は、17%であった。

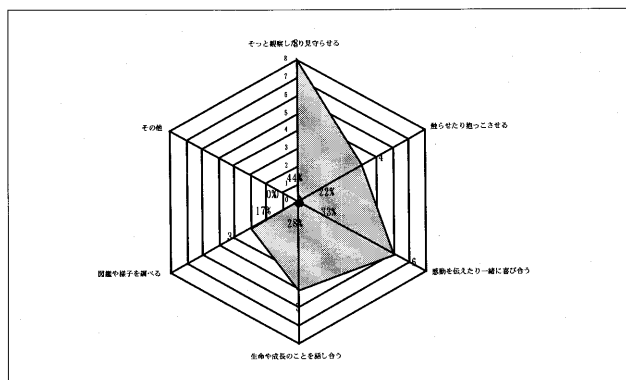


Fig. 9 動物の子どもが生まれた時の対応（無認可保育園；18園）

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、無認可保育（託児）園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員が始末する」（50%）、二番目に高い割合で挙げられたのは、「職員と子ど

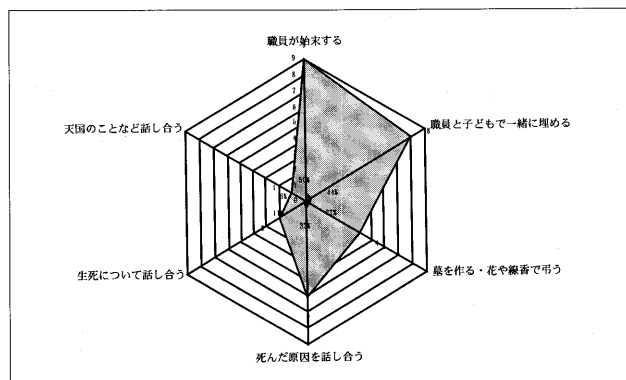


Fig. 10 飼育している動物が死んだ時の対応（無認可保育園；18園）

もとで一緒に埋める」（44%）であり、ほぼ5割の園であり、「死んだ原因について話し合う」（33%）、「墓を作ったり、花や線香で弔う」は、22%であり、「天国のことなどについて話し合う」は僅かに6%の園であった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期こうし

た「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとって極めて重要であると考えられる。

4 各園での共通性（以降のFig. 参照のこと）

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」（76%）、ほぼ4分の3の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」（69%）でありほぼ7割の園であった。

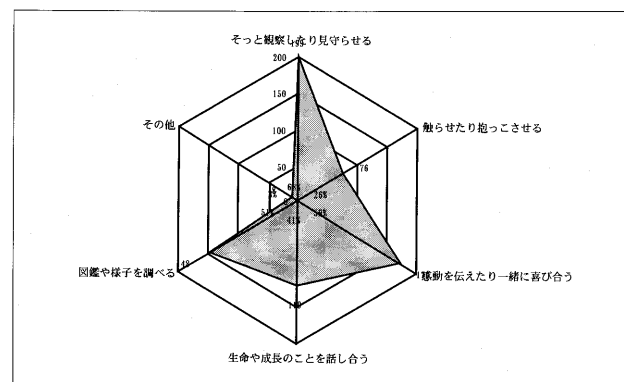


Fig. 11 動物の子どもが生まれた時の対応（全保育園&幼稚園；291園）

三番目に高い割合で挙げられたのは、「触らせたり抱っこさせたりする」（47%）ということであり、ついで、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」（43%）、「図鑑や様子を調べる」（43%）ということであった。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもで一緒に埋める」（94%）であり、ほぼ9.5割の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」（78%）でありほぼ8割の園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」（75%）とほぼ4分の3の園であり、また、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」（61%）、「天国のことなどについて話し合う」（41%）ということであった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期こうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成

乳幼児と動物飼育活動

71

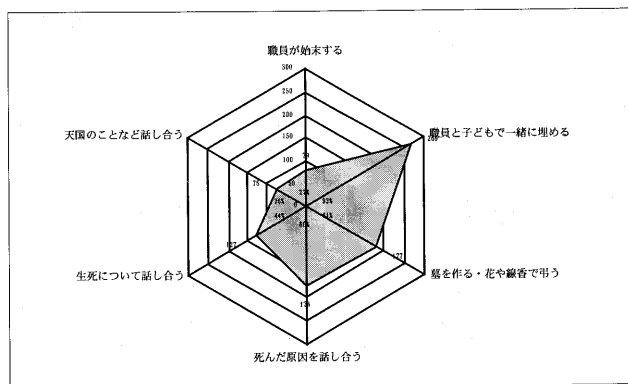


Fig. 12 飼育している動物が死んだ時の対応（全保育園&幼稚園；291園）

長・発達」にとって極めて重要であると考えられる。

- (4) 幼稚園・保育園で飼育している動物の「生、死」に際しての対応と「優しさや思いやりを育てる」との相互的な関連について

- 1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

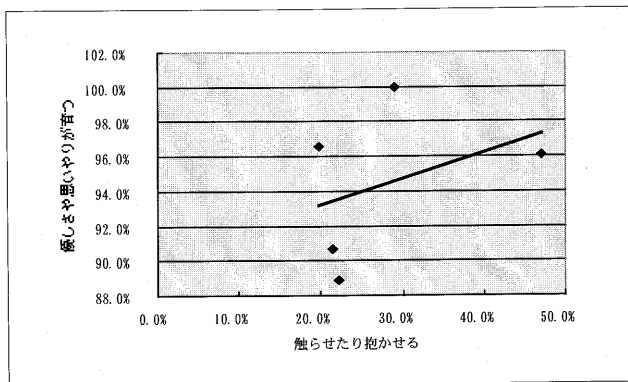


Fig. 13 優しさと触らせたり抱かせるとの相関 ($r=0.37$)

72

鎌田 文 聡

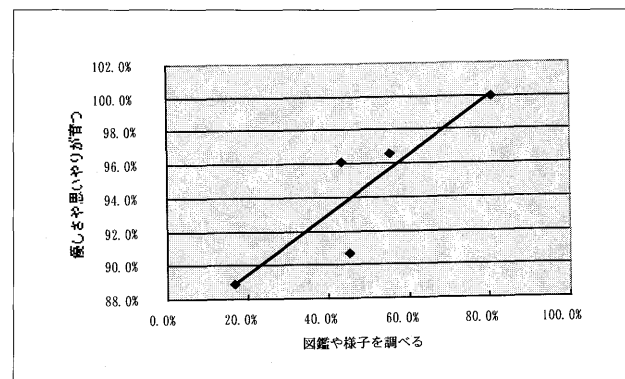


Fig. 14 優しさと図鑑や様子を調べるとの相関 ($r=0.89$)

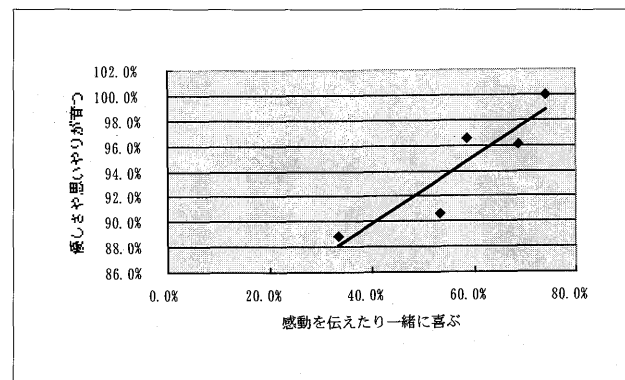


Fig. 15 優しさと感動を伝え一緒に喜ぶとの相関 ($r=0.91$)

上記の三つの Fig. は動物飼育活動によって「優しさや思いやりが育つ」ことがあきらかにされてきたが、特に「動物の子どもが生まれたときの対応」の中でどのような対応がどの程度相互的な関係にあるかを示したものである。これらの図から伺えるように、動物の子どもが生まれたとき、そうした生まれたばかりの子どもに、「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだとその相関係数は、0.37 とそれほど高いとは言えないことが示された。

しかし、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」により、その相関は0.89 とかなり高いことが示された。とりわけ、職員と子どもが一緒になって「動物の子どもの誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりすること」に

より、その相関は0.91とより高くなっていることが示された。

2)「飼育している動物が死んだときの対応」について

以下の四つの図は動物飼育活動によって「優しさや思いやりが育つ」ことがあきらかにされてきたが、特に「動物の子どもが死んだときの対応」の中でどのような対応がどの程度相互的な関係にあるかを示したものである。

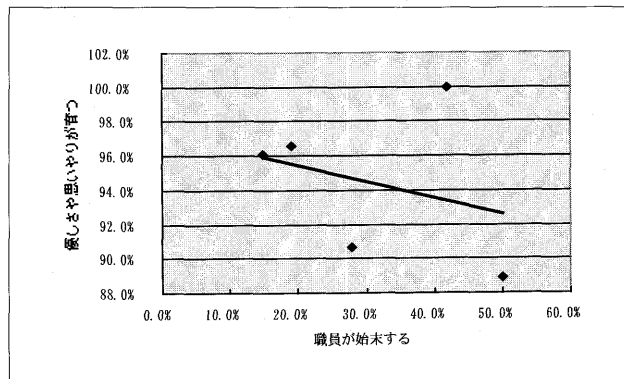


Fig. 16 優しさと職員が始末するとの相関 ($r=-0.31$)

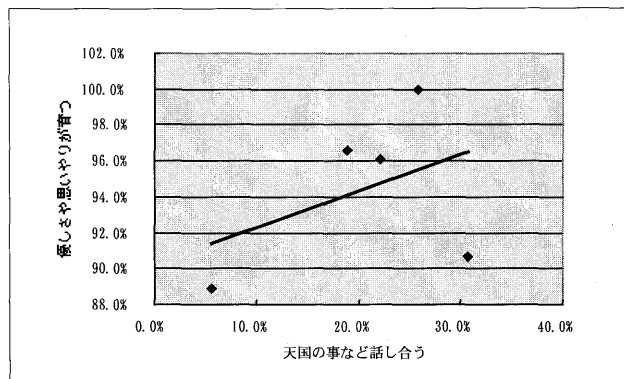


Fig. 17 優しさと天国の事等話し合うとの相関 ($r=0.43$)

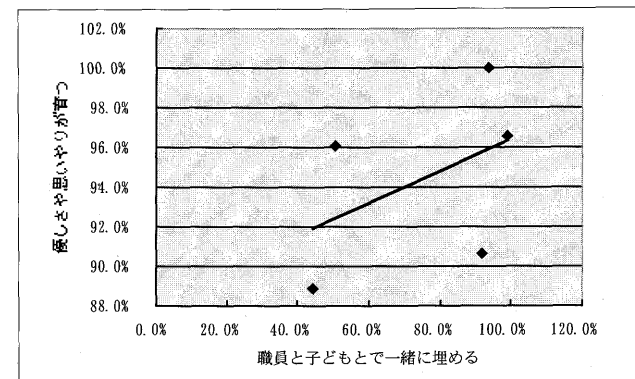


Fig. 18 優しさと職員と子どもと一緒にうめるとの相関 ($r=0.46$)

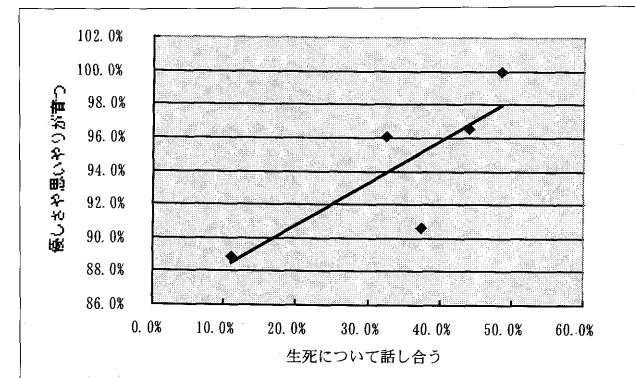


Fig. 19 優しさと生死について話し合うとの相関 ($r=0.81$)

これらの図から伺えるように、動物の子どもが死んだとき、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」だけだとその相関係数は、 -0.31 と、むしろ逆相関であることが示された。特に配慮すべきであることが伺える。

また、単に「天国のこと等を話し合ったりする」対応でも、その相関は0.43とそれほど高いとはいえないことが示された。さらに、「職員と子どもと一緒に墓などつくって埋める」ことにより、その相関は0.46と多少は高くなっているものの、やはり、それ程高いとはいえないことも示された。

大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に生死についてじっくり話し合った

り、そのうえで一緒に丁寧に吊ったりする」対応が、重要であることが改めて示されている。ちなみに、その相関は0.81であった。

おわりに

「生、死」への対応としての上述のことからも伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応を大切にしたり取り組みをしているが、「飼育している動物が死んだとき」の対応の方を、より多くの園で重視していることが伺える。

幼児期に、こうした「動物が死んだときの対応」として大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に日々飼育してきた目の前のその動物の生死についてじっくり話し合い、そのうえで一緒に丁寧に吊ったりする」といった対応が、生命の大切さや優しさを育み、「共生」を重視するその後の「心の成長・発達」にとって、とりわけ重要であるということを示唆している。

「天国のこと等を話し合ったりする」とか「職員と子どもと一緒に墓などつくって埋める」といった対応も一定程度有効ではある。しかし、特に配慮しなければならないことは、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」といった対応をさけることである。そうした対応は、時に逆効果をもたらしかねないということを肝に命じる必要がある。

また「動物の子どもが生まれたときの対応」も重要であることは明らかである。

特にも、職員と子どもと一緒に「動物の子どもの誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりする」ことが「優しさ」を育む上で最も大切な取り組みである。もちろん、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」も大切であることは論を待たなくてもいい。しかし、単に「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだと、それほど「優しさ」を育むことには有効に作用するわけではないことにも留意する必要がある。

文 献

鎌田文聡, 1999, 保育園・幼稚園における「動植物の飼育、栽培活動」の岩手の現状—保育園・幼稚園における「動(植)物の飼育(栽培)活動」に関するアンケート調査—, 人と動物のこころ研究会, 杜陵プリント社。

鎌田文聡, 2000, 乳幼児と動植物飼育, 栽培活動—岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報2:「有効性」を中心に)—, 人権感覚の発達とその指導, 岩手大学教育学部付属幼稚園, 岩手大学教育学部付属小学校, 岩手ワークショップ, 80~89。



3 乳幼児と動物飼育活動

一 岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報4)

統合保育実施園と未実施園での「有効性」の相違 一

鎌田 文 聡

(2002年9月26日受理)

問 題

「動植物飼育・栽培活動」に関する保育園、幼稚園における岩手の実態調査研究(鎌田:1999, 鎌田:2000, 鎌田:2001)から、「動植物飼育・栽培活動」や「動植物との触れ合い活動」が乳幼児にとって良かった点として、概略、以下の諸点が明らかにされてきた。

①「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」という点が、「動物飼育活動」では100%の園で、「植物栽培活動」では96.6%の園であげられた。このことは、「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそはじめて、その後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらには、そのあり方が形成されていくものであることを示している点で、その意義は極めて大きい。

②「優しさや思いやりが育つ」という点は、「動物飼育活動」では94.5%の園で、また「植物栽培活動」では64.7%の園であげられた。注目すべきことは「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも3割ほどより高いことであり、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要な点である。

③「生死や成長や生態を理解できる」という点は、「動物飼育活動」で88.0%、「植物栽培活動」では62.9%の園であげられた。生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって、如何に大切な活動であるかを示している。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも2.5割ほど高い割合を示していたことの意味は、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、重視すべき活動であることを示唆している。

④「子ども同士の仲間関係にも好影響をもたらす」という点は、「動物飼育活動」で43.6%、「植物栽培活動」では37.9%の園であげられるにとどまっていた。どちらにおいても40%前後とそれ程多いとはいえない。しかし、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、園の種別を越えて前者の「動物飼育活動」であることが示唆されている。

⑤「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点として、園種別を越えて共通的に挙げられた。「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも5~10%前後も高い。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で29.0%、「動物飼育活動」で24.7%の園であげられているにとどまっていたが、後者よりも4.3%程ではあるが、前者の「植物栽培活動」の方が高

く、今後の取り組みに際して注目すべきであることを示唆している。

⑥ 動物の子どもが生まれたとき、そうした生まれたばかりの子どもに、「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだと「優しさや思いやりが育つ」との相関係数は、0.37とそれほど高いとは言えないことが示された。しかし、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」により、その相関は0.89とかなり高い。とりわけ、職員と子どもと一緒に「動物の子ども誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりすることにより、その相関は0.91とより高くなっていることが示される等、感覚的に捉えたものを、より高次元認識に高めていく取り組みが重要であることが示唆された。

⑦ 動物の子どもが死んだとき、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」だけだと「優しさや思いやりが育つ」との相関係数は、-0.31と、むしろ逆相関であることが示された。特に配慮すべき点であることが窺える。

⑧「天国のこと等話を合ったりする」対応でも、「優しさや思いやりが育つ」との相関は0.43とそれほど高いとはいえないことが示された。さらに、「職員と子どもと一緒に墓などつくって埋める」ことにより、その相関は0.46と多少は高くなっているものの、やはり、それ程高いとはいえないことも示された。大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に生についてじっくり話し合ったり、そのうえで一緒に丁寧に弔ったりする」対応が、重要であることが改めて示されている。ちなみに、その相関は0.81であった。

⑨「生、死」への対応としての上述のことからも窺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応を大切にしている取り組みをしているが、「飼育している動物が死んだとき」の対応の方を、より多くの園で重視していることが窺える。

⑩ 幼児期に、こうした「動物が死んだときの対応」として大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に日々飼育してきた目の前のその動物の生死についてじっくり話し合い、そのうえで一緒に丁寧に弔ったりする」といった対応が、生命の大切さや優しさを育み、「共生」を重視するその後の「心の成長・発達」にとって、とりわけ重要であるということを示唆している。

⑪「天国のこと等話を合ったりする」とか「職員と子どもと一緒に墓などつくって埋める」といった対応も一定程度有効ではある。しかし、特に配慮しなければならないことは、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」といった対応をさせることである。そうした対応は、時に逆効果をもたらしかねないということを肝に命じる必要がある。

⑫「動物の子どもが生まれたときの対応」も重要であることは明らかである。特に、職員と子どもと一緒に「動物の子ども誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりすること」が「優しさ」を育む上で最も大切な取り組みである。もちろん、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」も大切であることは論を待たずである。しかし、単に「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだと、それほど「優しさ」を育むことには有効に作用するわけではないことに留意する必要がある。

上記のように「動物飼育活動」や「植物栽培活動」が乳幼児期の子どもにとっての有効性が明らかにされてきた。ここでは、これらの諸点も踏まえ、乳幼児期(就学前)の子どもにおける「動物介在活動(Animal Assisted Activity: AAA)」についての基礎的研究として提起するものである。本稿では、筆者が1998年10月1日~11月30日までに実施した「動植物介在活動に関するアンケート調査研究」を下に、継続的に報告しているその第4報として、障害児を含めた統合保育を実施している園と統合保育未実施園での動物飼育活動の「良かった点:有効点」に焦点を当て、それらの結果を比較考察するものである。つまり、統合保育を実施しつつ、動物飼育活動をしている保育園や幼稚園

* 岩手大学教育学部

園の方が、統合保育未実施園での動物飼育活動の有効点よりも、全般的により高いのか、同程度なのか、あるいは低いのか、また、その程度はどの程度なのかについてである。障害児の統合保育・教育との関連での動物飼育活動研究は、極めて重要であると考えられるが、筆者の知る限りそうした研究はほとんど無く、本研究がはじめてのものである。

研究目的

岩手県内にある就学前教育の場である保育園や幼稚園や託児室における動物飼育活動の「良かった点(有効性)」に視点を当て、障害児や障害の疑いのある子どもを含めた統合保育を実施している園と統合保育を実施していない園での有効性の実態を明らかにすること、と同時に、それらの程度を比較分析、検討することを通し、より生命を重視した「共生」をベースに、21世紀のよりよい統合保育・教育の在り方を動物飼育教育活動の在り方を通して考察することを目的とする。

研究方法

1998(平成11)年10月から11月末まで、岩手県内にある認可・無認可保育園、託児所や幼稚園(季節により休園中またはすでに休園となっている園は含まない)のすべての園を対象に、以下の六点到焦点をあてた26項目のアンケート調査を郵送方式で実施し回収する。

1. 園の規模、障害児や障害の疑いのある子どもの入園状況
2. 園のある地域の自然環境(1988(平成1)年と1998(平成10)年の変化)
3. 飼育・栽培している動植物の種類と数
4. 子どもと動植物との関わり(毎日の世話や、動植物の誕生、芽が出たときまた、死や枯れたことを経験した時)
5. 園として動植物の飼育・栽培活動へのとらえかた(よかったこと、研修の機会等)
6. 動植物の飼育・栽培活動における悩みや困難

結果と考察

1) アンケート調査を依頼した岩手県内の保育園・幼稚園

アンケート調査対象園は、岩手県内にある国公市町村、私立また認可、無認可を問わず、全ての保育園や幼稚園である。大別すると、保育園444園、幼稚園130園、合計574園であった。認可・公立保育園が178園と最も多く、ついで認可・私立保育園が155園であり、認可・公立幼稚園68園、認可・私立幼稚園62園と、認可が無認可の保育園111園の4倍以上であった。

2) 回答のあった岩手県内の保育園・幼稚園数

有効回答を得た岩手県内の幼稚園(96園:73.3%)と保育園(302園:61.2%)は全体で391の園であり、ほぼ7割弱に当たる。認可・公立保育園からは、172園(96.6%)と最も多く、ついで認可・私立保育園の99園(63.9%)から、さらに認可・公立幼稚園からは58園(85.3%)、認可・私立幼稚園の38園(61.3%)、無認可・私立保育園の31園(27.9%)からも回答を得た。障害の疑いのある子どもが入っている園(以降:統合保育実施園と呼ぶ)が99園(24.7%)、入っていない園(以降:統合保育未実施園と呼ぶ)が302園(75.3%)であった。

3) 障害児や障害の疑いのある子どもの入園状況

- (1) 回答園にみる岩手県内での障害児や障害の疑いのある子どもの入っている園と入っていない園の数とその割合

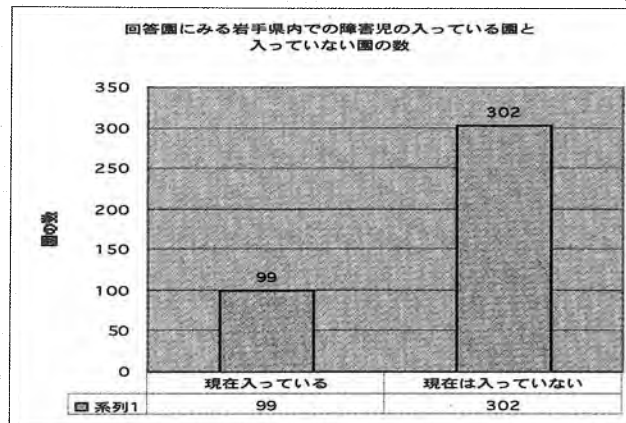


図1 回答園にみる岩手県内での障害児の入っている園と入っていない園の数と割合(1998.11時点)

上の図1は、回答のあった保育園と幼稚園401園の中で、1998年11月時点で何らかの障害を持っている、または、障害の疑いのある子どもが入っている園(以下、統合保育実施園と記す)が99園(24.7%)、入っていない園(以下、統合保育未実施園と記す)が302園(75.3%)であり、ほぼ、4分の1の園で、統合保育が実施されていることを示したものである。

さらに、下図2、次頁の図3は、保育園と幼稚園のそれぞれにおける統合保育実施園と未実施園の割合を示したものである。保育園の統合保育園の割合が全保育園の28.0%、幼稚園での統合保育園のそ

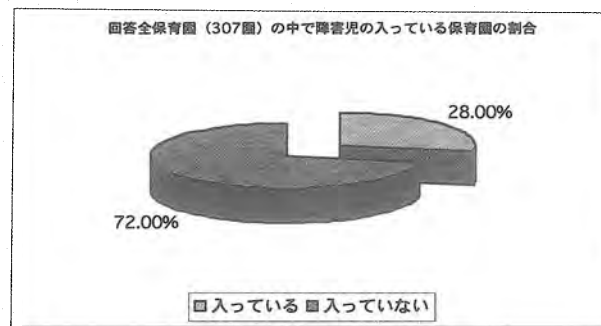


図2 回答全保育園(307園)の中で障害児の入っている保育園の割合(1998.11時点)

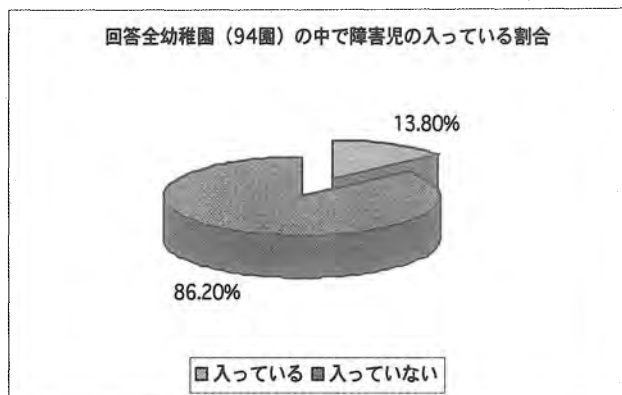


図3 回答全幼稚園（94園）の中で障害児の入っている保育園の割合（1998. 11時点）

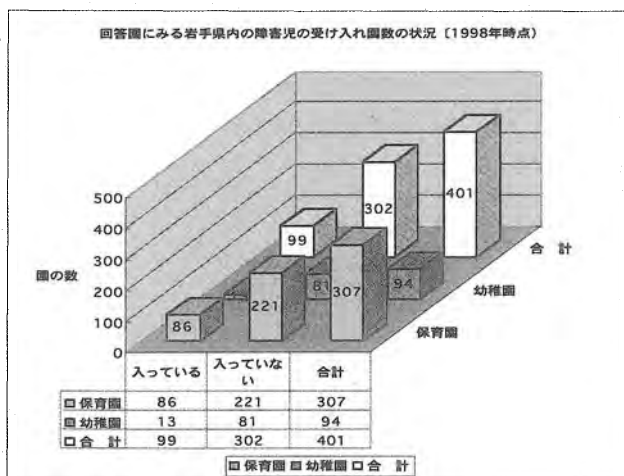


図4 回答園にみる岩手県内での障害児の入っている園と入っていない園の数とそれぞれの割合（1998. 11時点）

の割合は、13.8%と、保育園での統合保育の実施が、幼稚園のその2倍以上であることが窺える。また、保育園での統合保育園数と幼稚園での統合保育園数は、前者が86園（86.8%）、後者が13園（13.2%）であり、圧倒的に保育園での統合保育の実施園数が多いことが窺える。

上の図4は、回答のあった保育園や幼稚園の中で、障害児や障害の疑いのある子どもを受け入れている園のそれぞれの割合と実数を示したものである。この図から明らかな様に、回答のあった307園

の保育園のなかで障害児または障害の疑いのある子どもたちが、1998年11月1日時点で入っている割合は28%（86園）、入っていない園の割合は72%（221園）であった。ほぼ3分の1の保育園に入っている事が示されている。また、回答のあった94園の幼稚園の中では、そうした子どもたちが入っている園の割合は、13.8%（13園）、入っていない園の割合86.2%（81園）であった。ほぼ7分の1の幼稚園に入っているにすぎない事が示されている。

(2) 障害児や障害の疑いのある子どもの入っている保育園や幼稚園の種別毎の園児数の割合

下の図5、6は、回答のあった401園の保育園と幼稚園に1998年11月1日時点で入園している総園児数が25,411名であることを示している。

障害児として把握されている園児は169名（0.67%）、障害の疑いのある園児は69名（0.27%）であり、両者合わせても、1パーセント未満であった。因みに、健常児は25,173名（99.06%）と、9割9分と、ほとんどが健常児であった。

今回の調査が、かなり、限定された条件の中でのものであったとしても、障害、および障害の疑いの有る子どもを含めた場合の推定出現率が、少なくとも4~5%前後としたとしても、1%未満の乳幼児のみが、岩手県内の保育園や幼稚園などにおいて統合保育を受けているという実態は、かなり、少ないということが窺える。

21世紀は、ノーマライゼーション社会の形成が重要と叫ばれている今日、就学前教育の大切さとの観点からも、統合保育のニーズとの関連で、さらに深く考慮すべき実態にあると考えられる。

また図6では、年齢別クラスでそれぞれの人数を見たものである。障害児の年齢別クラスでは0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで5名、2歳児クラスで8名、3歳児クラス29名、4歳児クラス60名、年長の5歳児クラスでは67名であった。

また、障害の疑いのある子どもでは、0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで4名、2歳児クラスで7名、3歳児クラス17名、4歳児クラス22名、年長の5歳児クラスでは19名である。

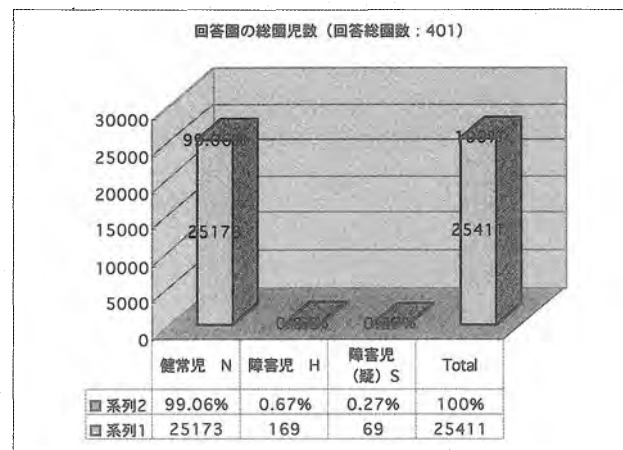


図5 回答園にみる岩手県内の健常児、障害児及び障害児（疑）の受け入れ園児数（1998. 11時点）

いずれも、年齢が高くなるにつれて、多くなっている。とりわけ、3、4歳児クラス以降が多くなっている。保育園や幼稚園児の受け入れが、この時期から多くなっていることを示している。

また、健常児では0歳児クラスで847名、1歳児クラスで1,676名、2歳児クラスで2,169名、また3歳児クラスでは5,245名、4歳児クラスで7,388名、年長の5歳児クラスでは7,848名である。

健常児についても、年齢が3歳以降、園児数も多くなっている。幼稚園において、この時期からの受け入れが多くなっていることによる。

(3) 回答園にみる健常児および障害児や障害の疑いのある総園児数

障害児の年齢別クラスでは0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで5名、2歳児クラスで8名、3歳児クラス29名、4歳児クラス60名、年長の5歳児クラスでは67名であった。

また、障害の疑いのある子どもでは、0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで4名、2歳児クラスで7名、3歳児クラス17名、4歳児クラス22名、年長の5歳児クラスでは19名である。

いずれも、年齢が高くなるにつれて、多くなっている。とりわけ、3、4歳児クラス以降が多くなっているのは、保育園や幼稚園児の受け入れが、この時期から多くなっていることによる。

さらに、健常児では0歳児クラスで847名、1歳児クラスで1,676名、2歳児クラスで2,169名、また3歳児クラスでは5,245名、4歳児クラスで7,388名、年長の5歳児クラスでは7,848名である。

健常児についても、年齢が高くなるにつれて、園児数も多くなっている。なかでも3、4歳児クラス以降が多くなっているのは、とりわけ幼稚園において、この時期からの受け入れが多くなっていることによる。

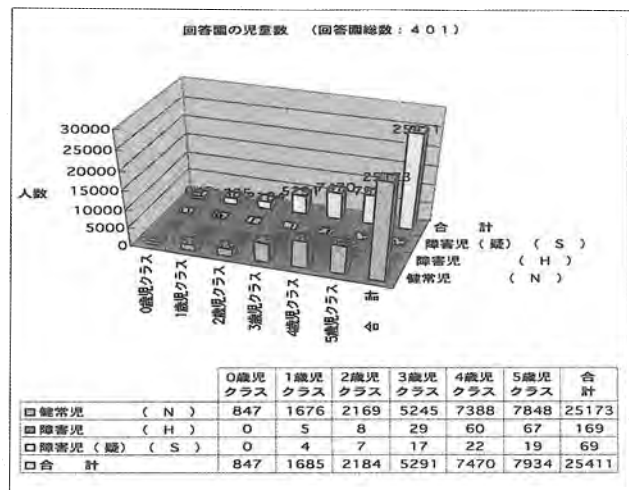


図6 回答園にみる岩手県内の健常児、障害児及び障害児(疑)の年齢別クラスの園児数(1998. 11時点)

4) 統合保育実施園と統合保育未実施園における動物飼育活動の有効性の相違

(1) 全回答園にみる統合保育実施園と統合保育未実施園の動物飼育活動の有効性の相違

表1 全回答園にみる統合保育実施園と未実施園の動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数: 105	統合保育未実施園数: 288
優しさや・思いやりが育つ	78.5%	68.6%
生死・成長・生態を理解できる	84.2%	58.7%
自然・生き物に直接触れられる	87.2%	75.9%
科学的な態度や力が育つ	25.6%	16.7%
園生活の動機づけになる	31.7%	27.2%
仲間関係にも好影響	36.5%	31.8%
職員や保育内容にも好影響	40.1%	25.8%
表現活動につながる	38.8%	25.3%

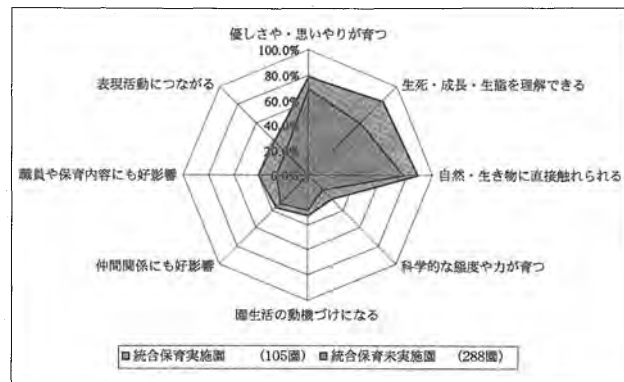


図7 全回答園にみる統合保育実施園と統合保育未実施園の動物飼育活動の有効点

上の表1、図7から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 動物飼育活動を実施している幼稚園、保育園、託児所の全回答園に見る限り、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で78.5%、統合保育未実施園では、68.6%と統合保育実施園の方が9.9%と、ほぼ1割も高いことが示された。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で84.2%、統合保育未実施園では、58.7%と統合保育実施園の方が25.5%と実に2.5割も高いことが示されている。このことの持つ意味も大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で87.2%、統合保育未実施園では、75.9%と統合保育実施園の方が11.3%とほぼ1割強も高いことが示されている。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は統合保育実施園で25.6%、統合保育未実施園では、16.7%と統合保育実施園の方が8.9%とほぼ1割弱ではあったが高いことが示されている。
- ⑥ 「仲間関係にも好影響」は、統合保育実施園で36.5%、統合保育未実施園では、31.8%と統合保育実施園の方が4.7%と若干高いことが示されている。
- ⑦ 「職員や保育内容にも好影響」は、統合保育実施園で40.1%、統合保育未実施園では、25.8%と統合保育実施園の方が14.3%とほぼ1.5割も高いことが示されている。
- ⑧ 「表現活動につながる」は、統合保育実施園で38.8%、統合保育未実施園では、25.3%と統合保育実施園の方が13.5%とほぼ1.5割弱ではあったが、やはり高いことが示されている。
- ⑨ 「園生活の動機づけになる」では、統合保育実施園で31.7%、統合保育未実施園では、27.2%と統合保育実施園の方が4.7%ではあったが、やはり多少高いことが示されている。

(2) 公立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表2 公立幼稚園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：3	統合保育未実施園数：55
優しさや・思いやりが育つ	85.5%	66.7%
生死・成長・生態を理解できる	76.4%	66.7%
自然・生き物に直接触れられる	100.0%	89.1%
科学的な態度や力が育つ	33.3%	29.1%
園生活の動機づけになる	33.3%	47.3%
仲間関係にも好影響	66.7%	54.5%
職員や保育内容にも好影響	66.7%	40.0%
表現活動につながる	66.7%	25.5%

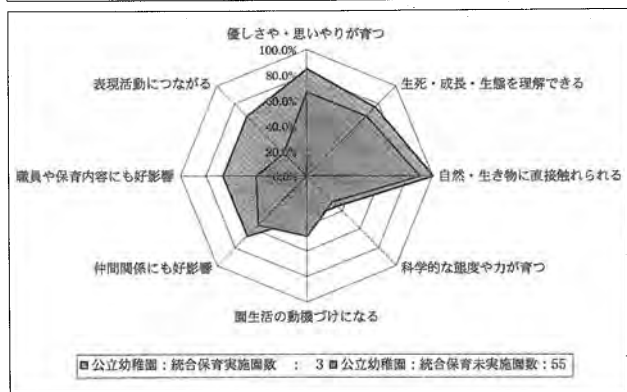


図8 公立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表2、図8から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 公立幼稚園における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で85.5%、統合保育未実施園では、66.7%と統合保育実施園の方が18.8%と、ほぼ2割も高いことが示された。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で76.4%、統合保育未実施園では、66.7%と統合保育実施園の方が9.7%とほぼ1割も高い。このことの持つ意味も大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」や「科学的な態度や力が育つ」は前者がほぼ8割前後、後者が3割前後と統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に若干有効性が高い割合で挙げられているもののそれほどの違いは認められないことである。
- ⑤ 「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」は、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ12%から41%ほど有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「職員や保育内容にも好影響」では、前者が、66.7%であるのに対して、後者が40.0%と26.7%も高いことや、また「表現活動につながる」では、前者が、66.7%であるのに対して、後者が25.5%と実に、41.2%も高いことは、注目に値する。
- ⑥ しかし、「園生活の動機づけになる」では、逆に統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも14%も低い割合あげられていた。

(3) 私立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表3 私立幼稚園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：11	統合保育未実施園数：26
優しさや・思いやりが育つ	90.9%	80.8%
生死・成長・生態を理解できる	90.9%	69.2%
自然・生き物に直接触れられる	90.9%	84.6%
科学的な態度や力が育つ	27.3%	15.4%
園生活の動機づけになる	45.5%	34.6%
仲間関係にも好影響	54.5%	38.5%
職員や保育内容にも好影響	45.5%	26.9%
表現活動につながる	36.4%	26.9%

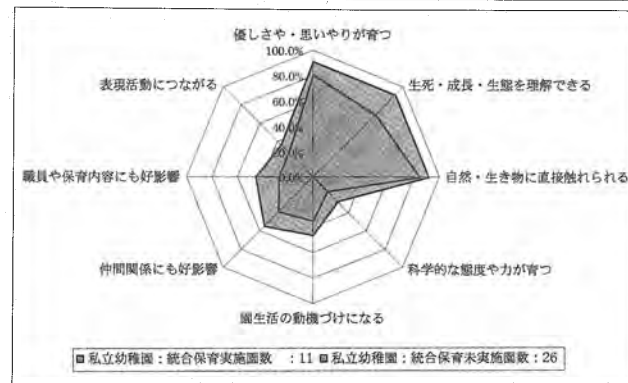


図9 私立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表3、図9から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 私立幼稚園における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、80.8%であげられており、統合保育実施園の方が10.1%、ほぼ1割ほど高い。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、69.2%であげられており、統合保育実施園の方が21.7%、ほぼ2割も高い。このことの持つ意味も大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、80%と統合保育実施園の方がほぼ1割も高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は、統合保育実施園で27.3%、統合保育未実施園では、15.4%と統合保育実施園の方が11.9%とほぼ1割強も高い。
- ⑥ 「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ10%から18%ほど有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「職員や保育内容にも好影響」では、前者が、45.2%であるのに対して、後者が26.9%と18.3%も高いことや、また「仲間関係に好影響」では、前者が、54.5%であるのに対して、後者が38.5%と実に、18%も高いことは、注目に値する。

乳幼児と動物飼育活動

137

(4) 公立保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表4 公立保育園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：53	統合保育未実施園数：116
優しさや・思いやりが育つ	77.4%	61.2%
生死・成長・生態を理解できる	86.8%	57.8%
自然・生き物に直接触れられる	84.9%	73.3%
科学的な態度や力が育つ	18.9%	18.1%
園生活の動機づけになる	28.3%	23.3%
仲間関係にも好影響	32.1%	28.4%
職員や保育内容にも好影響	34.0%	31.0%
表現活動につながる	39.6%	23.3%

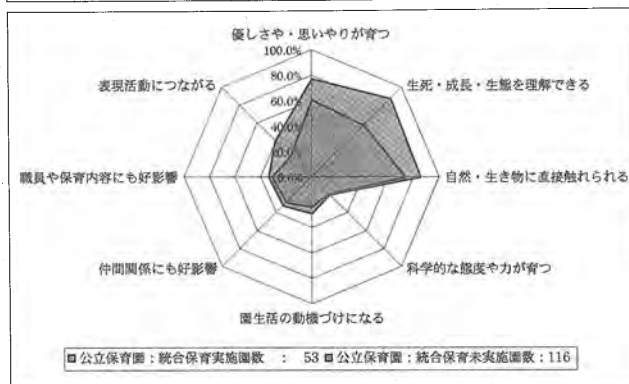


図10 公立保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表4、図10から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 公立保育園における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で77.4%、統合保育未実施園では、61.2%と統合保育実施園の方が16.2%も高い。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で86.8%、統合保育未実施園では、57.8%と統合保育実施園の方が29.0%とほぼ3割も高いことの持つ意味は特に大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、73.8%と統合保育実施園の方がほぼ2割弱も高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は、統合保育実施園で18.9%、統合保育未実施園でも、18.9%と統合保育実施園と同じ割合であった。
- ⑥ 「園生活の動機づけになる」、「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ4%から16%ほど、多少幅はあるが、有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「表現活動につながる」では、前者が、39.6%であるのに対して、後者が23.3%と16.3%も高いことは、注目に値する。

138

鎌田文聡

(5) 私立認可保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表5 私立認可保育園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：34	統合保育未実施園数：62
優しさや・思いやりが育つ	82.4%	71.0%
生死・成長・生態を理解できる	76.5%	69.4%
自然・生き物に直接触れられる	85.3%	80.6%
科学的な態度や力が育つ	23.5%	21.0%
園生活の動機づけになる	26.5%	24.2%
仲間関係にも好影響	29.4%	27.4%
職員や保育内容にも好影響	29.4%	27.4%
表現活動につながる	26.5%	33.9%

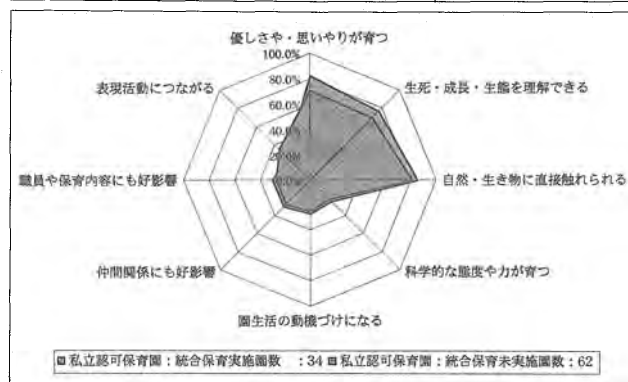


図11 私立認可保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表5、図11から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 私立認可保育園においても、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が多少高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で82.4%、統合保育未実施園では、71.0%と統合保育実施園の方が11.4%と、ほぼ1割程ではあるが高いことが示されている。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で76.5%、統合保育未実施園では、69.4%と統合保育実施園の方が7.1%と、僅かに高いことが示された。
- ④ 「生き物に直接触れられる」についても、統合保育実施園で86.2%、統合保育未実施園では、82.6%と統合保育実施園の方がほんの少し高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は、統合保育実施園で27.3%、統合保育未実施園では、15.4%と統合保育実施園の方が11.9%とほぼ1割強も高い。
- ⑥ 「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ同程度であった。
- ⑦ しかし、「表現活動につながる」では、統合保育実施園の方が逆に、統合保育未実施園よりも7.4%も低いことが示されてあった。このことは、どのようなことを意味しているのか、考える必要がある。

(6) 無認可私立保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表6 無認可私立保育園／託児所における

統合保育実施園と未実施園における動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：4	統合保育未実施園数：29
優しさや・思いやりが育つ	75.0%	44.8%
生死・成長・生態を理解できる	100.0%	20.7%
自然・生き物に直接触れられる	75.0%	51.7%
科学的な態度や力が育つ	25.0%	0.0%
園生活の動機づけになる	25.0%	6.9%
仲間関係にも好影響	0.0%	10.3%
職員や保育内容にも好影響	25.0%	3.4%
表現活動につながる	25.0%	17.2%

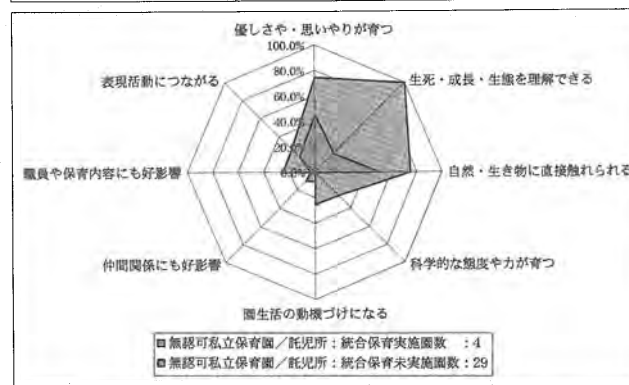


図12 無認可私立保育園／託児所における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表6、図12から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 無認可私立保育園や託児所における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも「仲間関係にも好影響」以外の項目において、有効性に際立った相違の有ることが示されている。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で75.0%、統合保育未実施園では、44.8%と統合保育実施園の方が30.2%と、ほぼ3割も高いことの持つ意味は極めて大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で100%、統合保育未実施園では、20.7%と統合保育実施園の方が79.3%とほぼ8割も高いことの持つ意味も極めて大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で75.0%、統合保育未実施園では、51.7%と統合保育実施園の方が23.3%とほぼ2割も高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」、「園生活の動機づけになる」の二つの項目に於いては、いずれも、統合保育実施園で25.0%、統合保育未実施園では、0%と統合保育実施園の方が25%も高い。このことの持つ意味も重要である。
- ⑥ 「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ8%から22%ほど有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「職員や保育内容にも好影響」では、前者が、25.0%であるのに対して、後者が3.4%と21.6%も高いことも高いことは、注目に値する。
- ⑦ しかし、「仲間関係にも好影響」については、統合保育実施園の方が逆に、統合保育未実施園よりも6.9%も低いことが示されてあった。このことは、どのようなことを意味しているのか、考える必要がある。

結 論

就学前教育の重要な役割を果たしている保育園や幼稚園の場における「動物飼育活動」の取り組みを、岩手県内にある、国、県、市町村の公、私立また、認可、無認可を問わず、全ての幼稚園、保育園および託児所等を対象に、筆者が1998年11月に実施した「動植物介在活動に関するアンケート調査研究」を下に、障害児を含めた統合保育を実施している園と統合保育未実施園での動物飼育活動の「良かった点：有効性」の結果を比較すると、概ね以下のことが明らかになった。

- ① 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で78.5%、統合保育未実施園では、68.6%と統合保育実施の方がほぼ1割も高い。
- ② 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で84.2%、統合保育未実施園では、58.7%と統合保育実施園の方が、実に2.5割も高い。
- ③ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で87.2%、統合保育未実施園では、75.9%と統合保育実施園の方がほぼ1割強も高い。
- ④ 「科学的な態度や力が育つ」は統合保育実施園で25.6%、統合保育未実施園では、16.7%と統合保育実施園の方がほぼ1割弱ではあったが高い。
- ⑤ 「仲間関係にも好影響」は、統合保育実施園で36.5%、統合保育未実施園では、31.8%と統合保育実施園の方が4.7%と若干高いことが示されている。
- ⑥ 「職員や保育内容にも好影響」は、統合保育実施園で40.1%、統合保育未実施園では、25.8%と統合保育実施園の方が1.5割も高いことが示されている。
- ⑦ 「表現活動につながる」は、統合保育実施園で38.8%、統合保育未実施園では、25.3%と統合保育実施園の方がほぼ1.5割弱ではあったが、やはり高いことが示されている。
- ⑧ 「園生活の動機づけになる」では、統合保育実施園で31.7%、統合保育未実施園では、27.2%と統合保育実施園の方が4.7%ではあったが、やはり多少高いことが示されている。

これらのことから、示唆されているように、障害児や障害の疑われている子どもたちと、健常といわれている子どもたちとの日常的なかかわりやふれあいを行いながら、統合保育を実施している園の子どもたちの方が、動物飼育活動を通じて、相乗的な効果として「優しさや思いやり」などの気持ち、また全般的に、動物飼育活動の「良かった点：有効性」の高いことが明らかとなった。

21世紀が、「共生」をベースにした、「新子どもの世紀」にふさわしい子どもたちを育む保育・教育のひとつの活動として、動植物飼育栽培活動を組織的、体系的に位置付けることは、極めて重要である。

文 献

- 鎌田文聰、1999、保育園・幼稚園における「動植物の飼育、栽培活動」の岩手の現状－保育園・幼稚園における「動（植）物の飼育（栽培）活動」に関するアンケート調査一、人と動物のこころ研究会、杜陵プリント社。
- 鎌田文聰、2000、乳幼児と動植物飼育、栽培活動－岩手の幼稚園・保育園の実態調査（続報2：「有効性」を中心に）一、人権感覚の発達とその指導、岩手大学教育学部付属幼稚園、岩手大学教育学部付属小学校、岩手ワークショップ、80～89。
- 鎌田文聰、2001、乳幼児と動植物飼育、栽培活動－岩手の幼稚園・保育園の実態調査（続報3：「生死」への対応）一、岩手大学教育学部研究年報、60（2）、61～75。

乳幼児と動物飼育活動

141

鎌田文聰, 2001, 乳幼児および小学生と動物飼育教育—岩手県における実態調査より—, 第132回日本獣医学会学術集会講演要旨集, 日本獣医学会 35.

鎌田文聰, 2001, こころを育てる—乳幼児と動物飼育活動—, 第132回日本獣医学会学術集会講演要旨集, 日本獣医学会 35, 5.



4 A Study of Relevance of the Effectiveness in Animal Breeding Education and Integration in the Infancy

Fumisato KAMADA

Department of Special Needs Education, Iwate University, Iwate, Japan

Introduction

For the past years Japan has given rise to such social problems of general concern as “class collapse,” “domestic violence,” “bullying,” “non-schools attendance,” “discrimination for handicapped children / person and prejudice,” “letting alone of pivot care senior citizen.” Religion, philosophy, and psychiatry are supposed to be effective in saving the “heart that went to ruin.”

The view that “the growth and development of heart” is influenced by feeling with friendly animals has received a wide consensus. However, in recent years, it has become extremely difficult to find a chance for such “feeling.” “Feeling with friendly animals” is important for infants whose possibility of development is often hidden behind ordinary activities.

The 21st century should be “a new century for children” and it is the duty of us adults to promote the growth of children.

Purpose

The purpose of this study is to make clear through animal breeding education the effectiveness in animal breeding education and integration of the infancy in the nursery schools or in the kindergartens where the integration was carried out or where it was not carried out.

Methods

As a method of this study the questionnaire investigation was mailed to all nursery schools and kindergartens in Iwate Prefecture from November 1998 to February 1999 (total: 576).

Results

The number of nursery schools and kindergartens which gave answers is as follows. The numbers of answers from the kindergartens are 96(73.3%). And the numbers of answers from the nursery schools are 302(61.2%). The total numbers of answers are 398 (around70%). Public nursery schools are 172 (96.6%). Private nursery schools are 99(63.9%). Public kindergartens are 58 (85.3%). The Integrated Nursery Schools (afterward : INS) and the Integrated Kindergartens (afterward : IK) are 99 (24.7%). Non-INS and non-IK are 302 (75.3%).

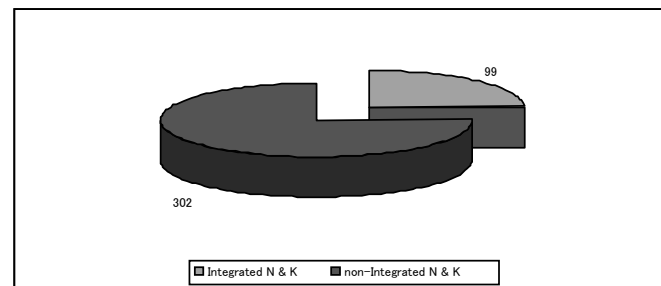


Fig.1 The ratio of the Integrated and non-Integrated Nursery Schools & Kindergartens

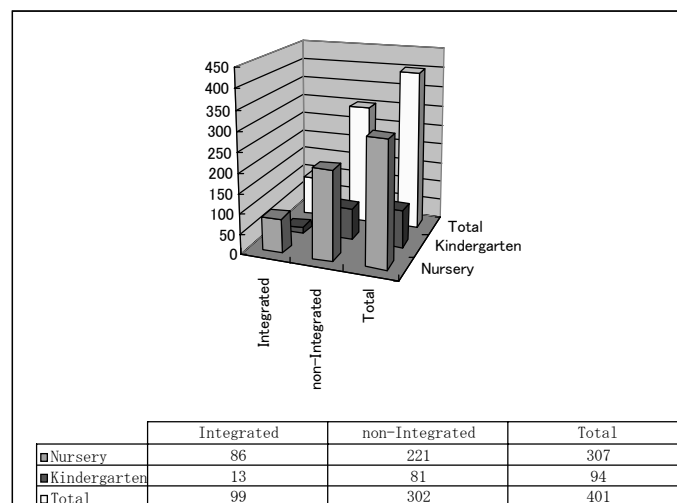


Fig.2 The number of the Integrated and non-Integrated Nursery Schools & Kindergartens

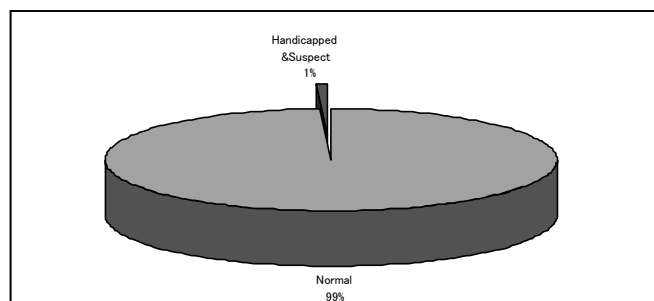


Fig.3 The ratio of the handicapped & suspect and normal children

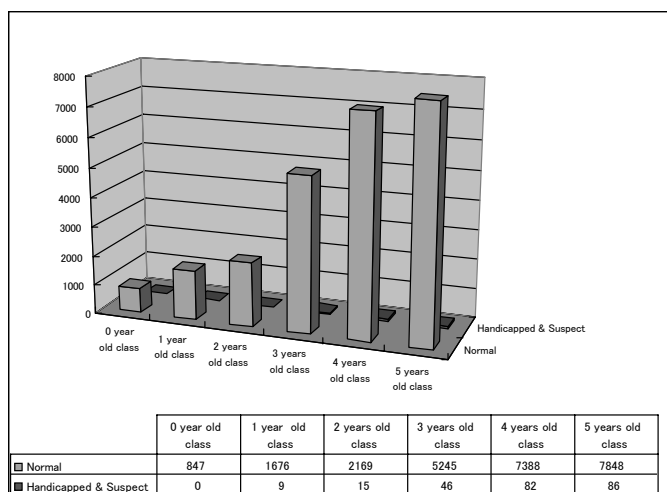


Fig. 4 The number of age class of handicapped & suspect and normal children.

As a result the following became clear.

1. Effectiveness in animal breeding education in the nursery schools and kindergartens where the integrated education was carried out (afterward : INK) and the nursery schools and kindergartens where it was not carried out (afterward : non-INK) .

Table 1 Effectiveness in animal breeding education in the Integrated and Non-Integrated nursery schools, kindergartens

	Integ.(105)	Non-Integ.(288)
Growth in gentleness and consideration	78.5%	68.6%
Understanding the life and death / growth / habits	84.2%	58.7%
Direct touch with nature / creature	87.2%	75.9%
Growth in scientific manner and ability	25.6%	16.7%
Activity leading to expression	31.7%	27.2%
Motivation for nursery schools / kindergartens life	36.5%	31.8%
Good influence on staffs and childcare contents	40.1%	25.8%
Good influence on friendly relationship	38.8%	25.3%

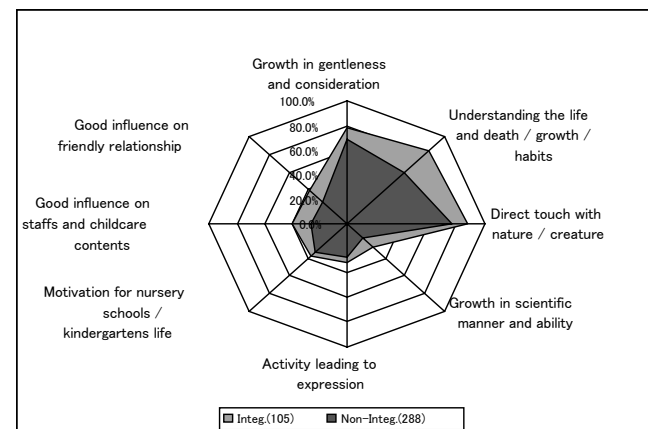


Fig. 5 Effectiveness in animal breeding education in the Integrated and Non-Integrated nursery schools, kindergartens

“Growth in gentleness and consideration” is recognized 78.5% in INK and 68.6% in non-INK.

“Understanding the life and death /growth/habits” is recognized 84.2% in INK and 58.7% in non-INK.

“Direct touch with nature /creature” is recognized 87.2% in INK and 75.9% in non-INK.

“Growth in scientific manner and ability” is recognized 25.6% in INK and 16.7% in non-INK.

“Activity leading to expression” is recognized 38.8% in INK and 25.3% in non-INK.

“Motivation for nursery schools life”, “Good influence on staffs and childcare contents” and “Good influence on friendly relationship” are recognized around 30% ~40% in INK and in non-IPNS are recognized around 30% in non-INK.

2. Effectiveness in animal breeding education in the public nursery schools where the integrated education was carried out (afterward : IPNS) and the nursery schools where it was not carried out (afterward : non-IPNS) .

Table 2 Effectiveness in animal breeding education in the public Integrated nursery schools and non-Integrated nursery schools

	Integ.(53)	Non-Integ.(116)
Growth in gentleness and consideration	77.40%	61.20%
Understanding the life and death / growth / habits	86.80%	57.80%
Direct touch with nature / creature	84.90%	73.30%
Growth in scientific manner and ability	18.90%	18.10%
Activity leading to expression	28.30%	23.30%
Motivation for nursery schools / kindergartens life	32.10%	28.40%
Good influence on staffs and childcare contents	34.00%	31.10%
Good influence on friendly relationship	39.60%	23.30%

“Growth in gentleness and consideration” is recognized 77.4% in IPNS and 61.2% in non-IPNS.
“Understanding the life and death /growth/habits” is recognized 86.8% in IPNS and 57.8% in non-IPNS.
“Direct touch with nature /creature” is recognized 84.9% in IPNS and 73.3% in non-IPNS.
“Growth in scientific manner and ability” is recognized 18.9% in IPNS and same 18.9% in non-IPNS too.
“Activity leading to expression” is recognized 28.3% in IPNS and 23.3% in non-IPNS.
“Motivation for nursery schools life”, “Good influence on staffs and childcare contents” are recognized around 30% in IPNS and in non-IPNS too.
“Good influence on friendly relationship” is recognized 39.6% in IPNS and 23.3% in non-IPNS.

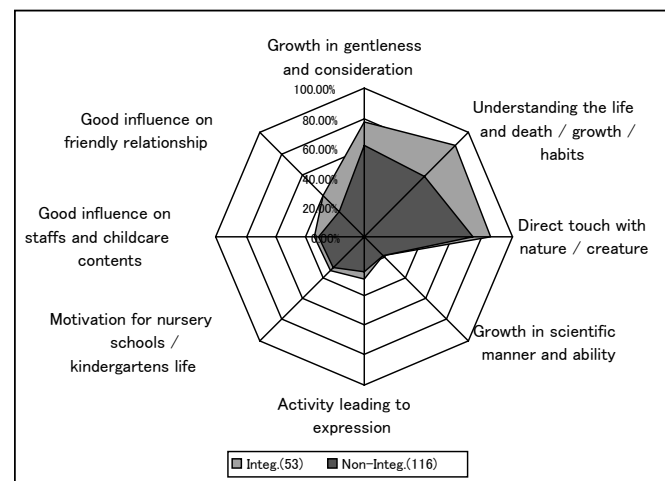


Fig. 6 Effectiveness in animal breeding education in the public Integrated nursery schools and Non-Integrated nursery schools

3. Effectiveness in animal breeding education in the kindergartens where the integrated education was carried out afterward : IK and the kindergartens where it was not carried out afterward : non-IK .
“Growth in gentleness and consideration” is recognized 90.9% in IK and 80.8% in non-IK.
“Understanding the life and death /growth/habits” is recognized 90.9% in IK and 69.2% in non-IK.
“Direct touch with nature /creature” is recognized 90.9% in IK and 80.0% in non-IK.
“Growth in scientific manner and ability” is recognized 27.3% in IK and 15.4% in non-IK.
“Activity leading to expression” is recognized 36.4% in IK and 26.9% in non-IK.
“Motivation for nursery schools life”, “Good influence on staffs and childcare contents” are recognized around 45% in IK too.
And “Good influence on friendly relationship” is recognized around 55% in IK but around 38% in non-IK.

Table 3 Effectiveness in animal breeding education in the private Integrated kindergartens and non-Integrated kindergartens

	Integ.(11)	Non-Integ.(26)
Growth in gentleness and consideration	90.9%	80.8%
Understanding the life and death / growth / habits	90.9%	69.2%
Direct touch with nature / creature	90.9%	84.6%
Growth in scientific manner and ability	27.3%	15.4%
Activity leading to expression	45.5%	34.6%
Motivation for nursery schools / kindergartens life	54.5%	38.5%
Good influence on staffs and childcare contents	45.5%	26.9%
Good influence on friendly relationship	36.4%	26.9%

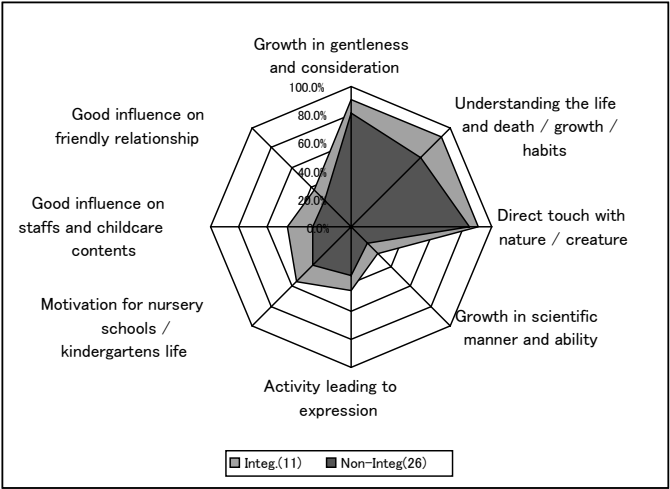


Fig. 7 Effectiveness in animal breeding education in the private Integrated kindergartens and non-Integrated kindergartens

carried out (afterward : non-IOPN) .

Table 4 Effectiveness in animal breeding education in the Integrated and non-Integrated nursery schools without permission

	Integ.(4)	Non-Integ.(29)
Growth in gentleness and consideration	75.0%	44.8%
Understanding the life and death / growth / habits	100.0%	20.7%
Direct touch with nature / creature	75.0%	51.7%
Growth in scientific manner and ability	25.0%	0.0%
Activity leading to expression	25.0%	6.9%
Motivation for nursery schools / kindergartens life	0.0%	10.3%
Good influence on staffs and childcare contents	25.0%	3.4%
Good influence on friendly relationship	25.0%	17.2%

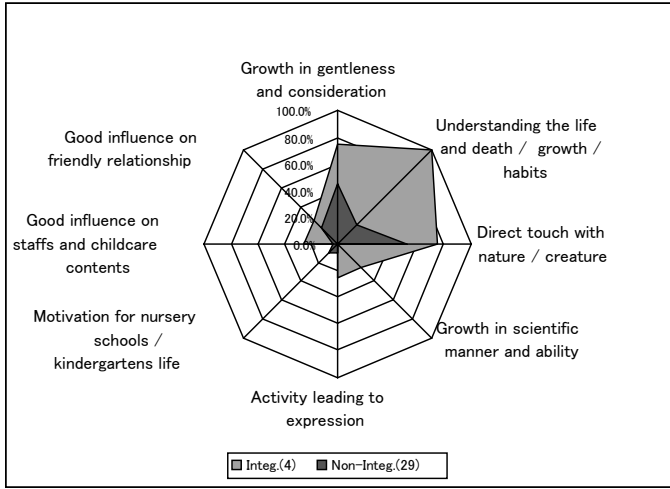


Fig. 8 Effectiveness in animal breeding education in the Integrated kindergartens and non-Integrated kindergartens without permission

4. Effectiveness in animal breeding education in the nursery schools without permission where the integrated education was carried out (afterward : IOPN) and the nursery schools where it was not

“Growth in gentleness and consideration” is recognized 75.0% in IOPN and 44.8% in non-IOPN.
“Understanding the life and death /growth/habits” is recognized 100% in IOPN and 20.7% in non-IOPN.
“Direct touch with nature /creature” is recognized 75.0% in IOPN and 51.7% in non-IOPN.

“Growth in scientific manner and ability” is recognized 25.0% in IOPN and 0% in non-IOPN.
“Activity leading to expression” is recognized 25.0% in IOPN and 17.2% in non-IOPN.
“Motivation for nursery schools life,” “Good influence on staffs and childcare contents” are recognized 25% in IOPN. But “Good influence on friendly relationship” is recognized 0% in IOPN and around 10% in non-IOPN.

Conclusions

1. The effectiveness in animal breeding education in the nursery schools and kindergartens where the integrated education was carried out is recognized higher than the effectiveness in animal breeding education in the nursery schools and kindergartens where the integrated education was not carried out.
2. The effectiveness in animal breeding education in the public nursery schools where the integrated education was carried out is recognized higher than the effectiveness in animal breeding education in the public nursery schools where the integrated education was not carried out.
3. The effectiveness in animal breeding education in the kindergartens where the integrated education was carried out is recognized higher than the effectiveness in animal breeding education in the kindergartens where the integrated education was not carried out.
4. The effectiveness in animal breeding education in the nursery schools without permission where the integrated education was carried out is recognized higher than the effectiveness in the nursery schools without permission where the integrated education was not carried out.

References

- Kamada, F.(1999) Nursery School and Kindergarten Children Raising Animals and Cultivating Plants in Iwate (Report), The Iwate Hito to Doubutu no Kokorokenkyuukai, 1~84. (in Japanese)
- Kamada, F.(2000) Nursery School and Kindergarten Children Raising Animals in Iwate (Report 2), Annual Report of the Kindergarten and the Eementary school of Iwate University, Iwate Workshops, 80~89. (in Japanese)
- Kamada, F.(2001) Nursery School and Kindergarten Children Raising Animals in Iwate (Report 3), Annual Report of the Faculty of Education, Iwate University, 60(2), 61~75. (in Japanese)
- Kamada, F.(2003) Nursery School and Kindergarten Children Raising Animals in Iwate (Report 4), Annual Report of the Faculty of Education, Iwate University, 61, 127~141. (in Japanese)